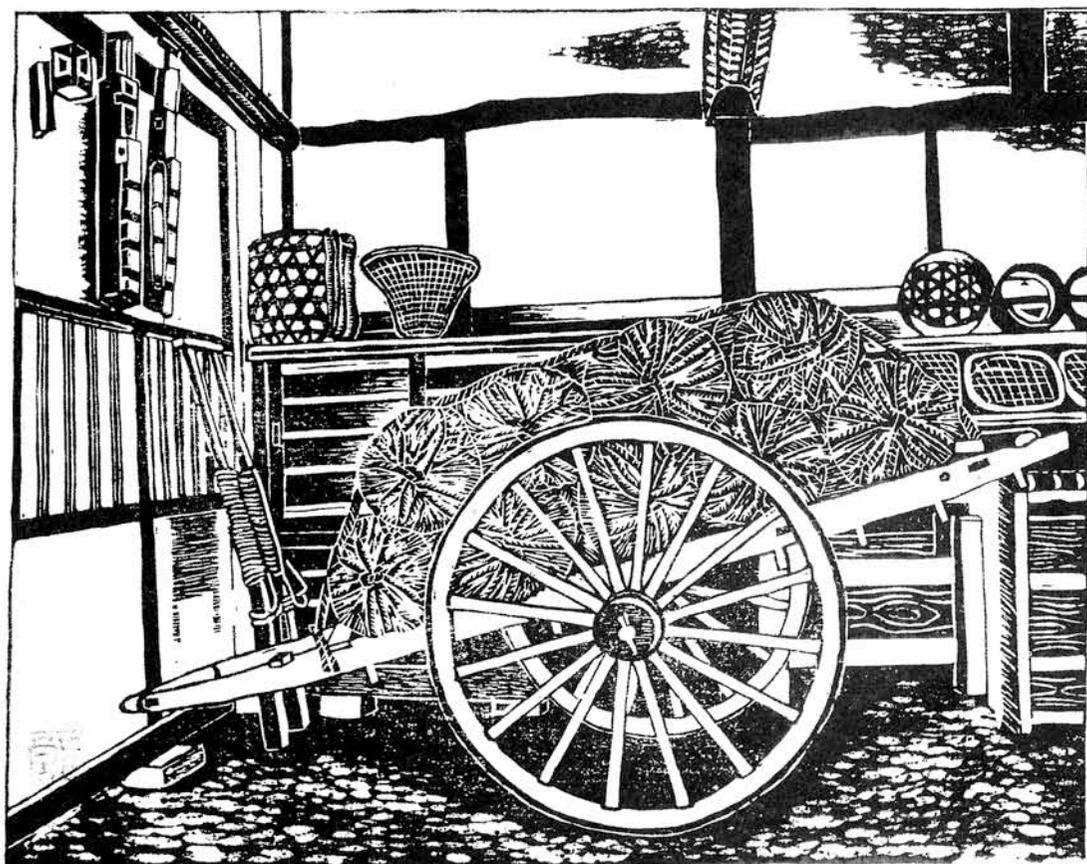


としのかん村

第10号

2012.02.01



佐野友三郎のこと、一こま

《寄稿》

ザビエルを語る

小川 徹

はじめに

1871(明治4)年、出来たばかりの政府の主要なメンバー、岩倉具視(団長)、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文ら一行約50名の使節団が条約改正を目的に、同時に世界をみてくるという大切な役割を持ってアメリカ、ヨーロッパをほぼ2年かけて巡って帰ってきました。その報告書が『米欧回覧実記』(久米邦武編著)。大変興味深い作品です。一行は各国で図書館についても見学しました。パリでは国立図書館に行きます。その壮さに目を奪われるのですが、この『実記』はそれだけに終らず、「記伝文籍ノ如キハ、其国の時代」の浮き沈みをみるうえで宝なので「廃紙残簡モ、亦収録シテ失ハサルヲ務メサルヘカラス、西洋ノ書庫、博物館ヲミル毎ニ、其用意ノ厚キ、我東方ノ遠國ノ物モ、重貨ヲ惜マス、労苦ヲ厭ハス、收拾採録セリ」「千百年ノ智識、之ヲ積メハ文明ノ光ヲ生ス」と大切なところを見落とすことなく書いています(岩波文庫本、(三)p.71-2)。この思想がその後の日本の図書館界にどのように受け継がれたのか、少し後のこととなりますが、少なくとも佐野友三郎は共有していました。

佐野は明治から大正にかけて山口県立山口図書館長としてアメリカの図書館事業に学びながら、当時の水準からするとひときわ優れたサービスを展開して、注目を集めました。同時に佐野は若い頃から内外の古典籍に関心があり、それをベースとして郷

土資料、古典籍の収集に力をいれました。

その佐野館長の姿の一端をみてみます。

山口に着任して

1903(明治36)年佐野は秋田県立秋田図書館長の職を辞して山口県立山口図書館長として山口に着任し、図書館から北東の方向に1.5kmほどの八幡馬場の一面に居をかまえます。そして着任早々近所に住んでいる郷土史家として著名な近藤清石翁を訪ねます。初対面ながらうちとけて語り合ったようです(「防長新聞」1919(大正8).4.6)。

郷土資料を収集する

「山口県立山口図書館年報5」(1906年)には「一国の文献を蓄積保存するは国立図書館の任務なるが如く、一地方の文献を蒐集して広く公衆の参考に資し、永く之を後世に伝ふるは、地方図書館の任務ならざるべからず。山口図書館に於ては、苟も、防長二州の地と人とに関するものは、事績沿革の徴すべきものは勿論、旧記、雑書の類より断簡零墨に至るまで、拾く之を網羅せん目的を以て、本館目録中特に防長叢書の一欄を設け、得るに随ひて之を収録し」、刊本、写本を問わず「購ふべきものは購ひ、筆写すべきものは筆写し」ひろく県内外の蔵書家、篤志家の援助をえて充実したい、この事業には近藤とともにいずれも山口のひとですが、宮川臣吉、小原聞一らの協力をえていると書かれています。

そうした人びとの協力をえて、例えばい
ずれも貴重な『大内家古実類書』（12冊）、
『大内氏実録』（5冊）、『防長古文書誌』
（32冊）、『防長風土記注進案』（395
冊）、『閔閱録』（206冊）といった文献
や「大内版法華経」とよばれる經典とその
板木などを寄贈・寄託・購入によって収集
しています。また所蔵者が県内の『塩製秘
録』や『防府金石誌』など、帝国図書館所
蔵の『防長両国産物名寄』を書写していま
す。『中国描談』（室町時代、大永5年（1
525）周防国の僧侶宗設が大内氏の遣明
使僧として明国に行き、貿易の仕事に携わ
っていた時書いた地理書）は伝来するなか
でほとんどが失われ零本が伝わるのみなの
ですが、その写本が南葵文庫（紀州徳川家
の文庫）にあり、それを書写、寄贈しても
らい、後（1920年3月）に佐野はこの写
本を京都大学図書館所蔵本と校合しました。

1914年7月24-5日に山口県図書
館協会総会が行われ、そのさい「(毛利)元
就卿事蹟、防長人著述、展覧会」を行いま
した。「防長新聞」(同年8.4)は、これ
は極めて有益なものであり「あれ迄に気を
配り手を回して、多くの材料を搜索し簡括
し分類せられた佐野館長を始めとし、関係
者諸氏の労を実に多とするに余りある」と
述べています。

中国の古典籍にも手を広げて

1908(明治41)年暮れの県会に提出
された図書館予算に中国で刊行された『十
八史略』の購入費(500円)をいれたの
ですが、県会では高価すぎる、そういうも
のは寄贈してもらえ、と削除されました
(「防長新聞」同年11.28)。当時図書
館費7千余円、図書費は2千円でした。と
てつもない買物です。佐野の一面を物語る
ものです。ついでながら、当時佐野の年俸
は1千円(県立中学校長レベル)、司書の

月給25円、書記の月給20円でした。

1919年のこと、「防長新聞」(5.19)
によると、宮野村の男爵木梨家から蔵書を
県立図書館に寄託したいと申し出があり、
佐野館長は出向いて調べました。佐野は、
蔵書は入念に保管されており、『佩文韻府』
(漢字を韻によって分類排列した清代の書)
などの美本が少なくないが、多くはすでに
図書館にある。それらを除いて『説郛(せ
つぷ)』(明代の120巻からなる叢書)
ほか十数部の寄託を受けることにした、
『説郛』は明倫館旧蔵のもので故近藤翁そ
他の愛書家の間で話題にのぼったもので
ある、と記者に語っています。

同じく1919年のこと。山口高等商業
学校の横地石太郎校長は東大の理科出身な
がら古典籍に詳しく、山口町の石津古本店
に出入していました。店は内外の古典籍に
埋もれており、ある時横地校長は「稀代の
珍本」宋版古書『漁隱叢話後集』(宋代の
詩話集、前集60巻、後集40巻)を店の
主人にみせられ一驚。そのことを東京から
山口高商に教えに来ていた稲葉君山(東洋
史家)に話したら、稲葉は話の途中でその
店に飛んでいき、何日もかよって調べ、そ
の結果を京都大学の内藤湖南(東洋学者)
に伝えます。話は広がり、大阪の古書店、
京都の漢学者神田香巖、佐野図書館長もは
いってだれが手にいれるか、侃侃諤諤。結
局最初に見つけた横地が55円で譲り受け、
これを稲葉に持たせて帰したと「防長新聞」
(12.24-27)は伝えています。(余談、
横地校長は山口に来る前は松山中学の教頭
でした。漱石の『坊ちゃん』の赤シャツの
モデルかとも云われています)

佐野館長、ザビエルを語る

「防長新聞」(1919年4.6-10)に
「山口重要史蹟：山口に於けるザビエ」が
「佐野館長談」として連載されました。

「ザビエ」はよく知られているフランシスコ・ザビエルです。当時ザウィエー、ザベリヨなども読まれていました。

これに先だって、1917（大正6）年「防長新聞」（10.28, 11.4）に山口出身で東京帝国大学史料編纂官であった渡辺世祐（日本中世史家）が「西洋文明の接触と山口」と題して一文を寄せています。その冒頭で「キリスト教徒が日本に布教の為に来たのは、従来幾多の説はあったが、今日では天文十九年七月三日（西暦一五五〇年八月十五日）であると定められたのである、其の最初の宣教師はフランシスコザヴェーと云ふ人で鹿児島に来航した」と述べています。またザビエルは山口に来て基督教の布教をはかった、その布教の中心地は「今から之を確知する事は困難であるが八幡馬場の北方」であったように伝えられているが、断言できないという。その後ザビエルは日本を去りますが、山口に留まっていた宣教師が大内義長から布教の許しをえて、大道寺を建立することを許されます。その時布教を許す公許状が出されました。こうしたキリシタン関係の史料はキリシタン弾圧のなかで失われるのですが、この公許状の写しが先年亡くなった近藤清石翁の「大内氏実録」に載せられており、その「記する処に依り考ふれば公許状はもと清石翁の所有であった」。しかし今どこにあるのかわからず、この原本をみたいと思いつながらまだ果たせていない、原本がなければこの公許状について確たることは云えないと述べています。

佐野はこの渡辺の議論を取り上げます。第一に、近藤清石翁が「毛利氏典籍中に大道寺裁許状を発見せりとあるも、余が親しく翁より聞き取りたる所によれば、全く誤聞誤記なりと云ひ」、渡辺が、近藤翁が公許状を持っていたとするのを否定します。そしてその公許状の原本はキリシタン禁制で破棄されたと考えられると語ります。第

二に、ザビエル来日のことについて。このことを論じたのは幕末から明治にかけてイギリスから日本に派遣された外交官アーネスト・サトウ（以下サトウ）が最初で、それはかれが「1878年11月27日「日本亜細亜協会」に於いて報告せられたる」

「自千五百五十年至千五百八十六年山口に於ける教会の変遷」であると云います*1)。ザビエルについては諸書あるが、マードック著英文『日本歴史』が「西人」に定評があること*2)、サトウに負う所が多い（と著者がいう）その第4章の「日本に於けるザビエ」によって、ザビエルが1549（天文18）年8月15日鹿児島に上陸したこと、その後山口に来たこと、京都に行き、再び山口に来たことなどを語っています。また自分は先日鹿児島に行き、ザビエ滞日記念天主会堂に寄ったが、その門扉の左右にはそれぞれ「フランシスコ、ザビエ聖師滞鹿児島記念」（[鹿児島]を上下に組んだ組文字、[島]字なし）「天文十八年西暦千五百四十九年八月十五日着」と書かれている。ザビエルの鹿児島での事蹟は何もないのに、この会堂があるので市民はザビエルのことを知っている。これに対して山口では布教の場となった大道寺がどこにあったのか、わからないまま顧みられていないのは残念だ、その遺跡を調査して山口の重要史蹟として保存されるべきものだとして述べ、あわせてこの遺跡を調査している外国人、ビリヨン、ゴルドンにふれています*3)。

佐野がこの時期このように語る理由があったようです。

実は、この年、1919年12月3日に山口町今道天主教会で来日370年記念聖フランシスコザベリオ師祝祭が予定されました。防長新聞社ではザビエルについてわからないことを佐野に調べて語ってもらったのだと思います。ザビエル来日年については、当時上記渡辺世祐の天文19年説

のほか天文18年説（佐野があげている文献（注2 参照のこと）は天文18年）や天文17年説（例えば『日本百科大事典 第6巻』三省堂、1912）がありました。これが確定しないとザビエル来日370年祝祭をこの年でできません。この年祝祭を行う上で、佐野の談話は不可欠だったのだと思います*3）。

「防長新聞」は「聖フランシスコザベリオ祝祭は三日午後七時山口今道天主教会に於て厳肅に執行せられ、若林氏、セツール氏、ビリヨン氏他一名の追悼及所感演説ありて十時過散会せり」（12.5）と伝えています。

おわりに

佐野の仕事のほんの一部をみてみました。佐野にとって図書館の仕事は自らに課した半生のミッションでした。郷土資料の探索・収集・研究はその一環でありながらも、佐野が一息つける分野だったのではないだろうか、と思っています。

○ ○ ○ ○

菅原さんから、「としょかん村」に書いてほしいと云われたとき、わたしは同人でないのではとお断りしたのですが、再度お誘いをいただき、この同人誌には似合わないと思いつつ、佐野友三郎のことについて駄文を書いてお送りしたところ、第8号に掲載してくださり、4回か5回くらい続けて書くようにと云われました。ありがたいことです。しかしかなわぬことになってしまいました。

菅原峻さんのご冥福をいのりつつ 筆を擱きます。 2012.1.10.

（おがわ・とおる／としょかん村友人

再刊「としょかん」誌 編集委員長
小金井市の図書館を考える会代表／東京）

注

1) 「日本亜細亜協会」(The Asiatic Society of Japan) は1872(明治5)年7月29日横浜の外国人商業会議所で設立されました。その頃日本に在住していた外国人は千人ほどでしたが、かれらのあいだで、日本についての情報を交換し研究しようという気運が高まり、設立されたのです。最初の頃の会員は百余名。最初の例会は1872年10月30日、横浜のゲーテ座で行われました。毎年なんども例会を行ない、そこで報告された論考は、のちの日本人による研究に刺激を与えたものが少なくないと云われています(楠家重敏『日本アジア協会の研究』日本図書刊行会、1997)。例会で報告されたものは『日本アジア協会紀要』(復刻版があります)に掲載されています。

ところでサトウの報告について、佐野は「報告されたる」といい、楠家重敏氏もこの日例会でこの報告を「口頭発表」したと云います。ともにサトウが当日出席して報告したと理解しているようです。しかし実はこの日サトウは日本にいません(ミステリー好きの筆者ゆえの道草をお許しいただき、以下)。

萩原延寿『遠い崖：14：離日』(朝日文庫)によりますと、1878年9月21日イギリスの商船バーバラ・テイラー号が済州島で難破し、その救助を島民が支援しました。船は長崎に戻り、イギリス側ではこれに感謝の意を朝鮮側に伝えるため(あわせて朝鮮の内情を探るため)、サトウを朝鮮に派遣します。

11月13日、サトウは従者を随えて広島丸で横浜を発ち、翌14日早朝神戸に着く。「横浜から神戸に来る途中、十六世紀の山口における初期キリスト教会の変遷を扱った論文の清書をすませた」と書かれています(佐野が取り上げた論文)。

11月16日早朝神戸を発つ。「一日中、表記法に関する論文を清書する」と。翌17日長崎に到着。19日長崎出航、翌20日濟州島に着く。先方との交渉。終えて同月25日釜山に。同月27日サトウらに乗せた軍艦イジーリア号は釜山を発ち、帰路につく。同月28日長崎に帰着。29日広島丸で長崎を出発。12月1日神戸に、汽車で京都に。3日京都を出て神戸に戻り、その日のうちに広島丸で横浜へ。5日横浜着。という旅程でした。

サトウは11月12日の例会で「古代日本の祭祀」について報告をしました(上記『日本アジア協会紀要』v. 6, pt. 2)。その翌日横浜から船に乗ったのです。そしてサトウは11月27日の例会で報告することができないとわかっていたのだと思いますが、その日のための論文を横浜から神戸に向かう船中で清書します(書かれていませんが、それを神戸から協会あてに送ったのでしょう)。問題の11月27日は釜山から帰国途上です。

その日の例会ではだれかわかりませんが、その報告を代読したのです(上記紀要v. 7)。

代読はよくありました。1877年11月10日の横浜のグランドホテルでの総会でサトウは日本に入ってきたタバコについて報告する予定でしたが、所用のため欠席し、秘書が代読しています(上記紀要v. 6, pt. 1)。

神戸から長崎に向かう間に清書した表記法に関する論文は翌1879年2月11日に湯島昌平館で行われた例会でサトウが報告しています(上記紀要v. 7)。

2) 「諸書」といいましたが、それらはいずれも県立山口図書館にあります。『日本西教史』(太政官、明治13)、1907(明治40)年6月10日受入。第一章がザビエル来日を語る部分でよく読まれています。『聖ふらんせすこざべりよ書翰記』

(浅井虎八郎、明治24)、2部あり、ひとつは1903(明治36)年7月12日山口県知事を勤めた原保太郎氏寄贈、もうひとつは1924(大正13)年10月10日防長新聞社より購入。前者のザビエル来日にかかわる部分はよく読まれています。後者にはほとんど読まれたあとがない。『山口公教史』(加古義一、明治30)、1903(明治36)年9月15日受入。読まれています。マードックの『日本歴史』はJames Murdoch “A History of Japan: during the century of early foreign intercourse(1542 - 1651)” (明治36年刊)のこと。1904(明治37)年3月30日受入です。その第4章が‘Xavier in Japan’で、佐野が語ったところ です。

平川祐弘『漱石の師マードック先生』(講談社学術文庫、1984)によればマードックはスコットランド人、1856年生まれ、1888(明治21)年来日、翌年より東京大学予備門で教鞭をとり(夏目漱石と出会う)、1893年辞職して日本を離れますが、翌年来日。各地を転々としますが、鹿児島に落ち着き造士館高等学校で教えながら『日本歴史』を書きます。そのことを知って、サトウやチェンバレンは多く資料を提供したとのこと。上記のものを『日本歴史』の第2巻として、まず神戸のクロニクル社から刊行しました(1903)。これは当時日本歴史の通史としては優れたものだと平川氏はいいます。第1巻は日本の起源からポルトガル人の来日まで、1910年東京とロンドンで刊行。第3巻は江戸時代、1926年ロンドンで刊行。3) ビリヨン(以下ヴィリヨン)神父は古地図によって大道寺の遺跡を探し当てます。佐野はその古地図について言及しているのですが、確信が持てなかったのでしょうか。遺跡はその地図によって金古曾町の一面と

確定（ヴィリヨン『山口大道寺跡の発見と裁許状に就て』大洋社、1926（大正15））、1921（大正10）年4月「ザベリヨ遺跡保存会」ができ、記念碑建立準備、1924年起工、1926年9月竣工。そして同年10月16日秋雨のなか盛大にザベリヨ遺跡記念碑除幕式が行なわれました（「防長新聞」同年10.17。その前後の同紙記事）。奈良に住んでいた85歳の「ヴィリヨン老師」もこの除幕式にきました（「防長新聞」同年10.14, 19）。

ゴルドンのことは「エリザベス、エー、ゴルドン夫人逝く」（東京市立図書館の館報『市立図書館と其事業』第33号：1925）、中村悦子「E. A. ゴルドン夫人の生涯」（「早稲田大学図書館紀要」30号：1989）、森睦彦「ゴルドン夫

人と日英文庫」（「東海大学紀要 課程資格教育センター」1：1992）。ゴルドン夫人はスコットランドの貴族J. E. ゴルドンの妻。1891（明治24）年来日、日本に魅せられて1907年再来日、一度は帰国しますが、その後は日本で過ごし、仏教、キリスト教などについての研究にうちこみました。大道寺跡についても関心をいただき、山口にきて調査をしています。記念碑建立にあたっては援助しました。

ゴルドン夫人はまた日本に洋書が少ないと聞き、米英カナダの新聞で訴えて9万冊ほどの洋書を集めて、日比谷図書館に寄託します。それが「日英文庫」。日比谷図書館は複本をいくつかの図書館に貸与します。山口図書館にも420冊貸与されました（「防長新聞」1911.1.10）。

菅原さん、夏の高尾山を登る

1967年 東京の東村山市では住民が電車図書館をつくり、それをばねに市立図書館設立を市に粘り強く働きかけた結果、1972年市は図書館設立専門委員会を発足させます。そこに日本図書館協会に在職中の菅原さんは前川恒雄さんとともに助言者として呼ばれます。図書館は1974年オープン。菅原さんは住民のすがたをつぶさに観察しており、それをふまえて『母親のための図書館』を出版（晶文社1980）。

そのかわり日本親子読書センター（1967年誕生。創設者、斎藤尚吾）の集いに参加。菅原さんは『タンポポの種を蒔いた人：斎藤尚吾追悼集』（志々目彰ほか編、書肆にしかわ、2003）に寄せた「尚吾先生の初志を受け継いで」に、「夏の高尾山に何回のぼっただろうか。そんなに多くはないのだが、私にとってはあの夏の集会参加が、その後の生き方に大き

く関わっていることを思わずにはおれない。．．．私は、図書館づくり運動の分科会に参加し．．．車座に加わりながら、図書館員でもない、運動の当事者でもない、そういう自分に出来ることは何だろうかと自問自答していた。その結果が、新聞とも雑誌ともつかない『としょかん』の発行」となったと書いています。

1978年3月 図書館計画施設研究所の開設
1978年8月21～23日
第16回親子読書研究集会（高尾山集会第1回）
1981年8月15日 「としょかん」創刊

菅原さんはこうして、新たな道を歩き始めるのです。しかしその道は果てしなく遠く、行きづまることもありました。そういうとき「若者たち」を口ずさむと語られました。二番は悲しくて歌えないと付け加えて。

（小川徹）

東日本大震災での 支援活動

《寄稿》

それを受けて私たちに出来ることを検討し、名取市図書館と連絡を取り合い、市の各部局とも協議の上支援内容を決めました。

丹羽秀人

図書館による図書館への支援

3月11日の東日本大震災は大きな被害を東北地方にもたらしました。勿論私も多くの人命が失われていく報道に驚くばかりでしたが、少し時間がたつてくると、この地区の図書館はどうなっているのだろうかと心配になりました。

震災から2週間たった頃、市長から東北の被災地に対して、石狩市独自でも被災地の子どもたちなどに何か支援できないか考えてくれ、という話があったと館長に言われました。私たちは図書館として何が出来るだろうと考えた時、避難所に児童書を持ち込み、読み聞かせをしたらどうかということはずぐに浮かびました。しかしそのようなことが現地で出来るのか必要とされているのかということにはわかりません。そこで、昨年2度当館に視察に来られた名取市図書館に電話をして相談することにしました。仙台近郊の名取市は地震と津波で大きな被害を受けたことが報道されていました。

名取市には「ハマボウフの会」という海浜植物保全に取り組む市民団体があり、同じくハマボウフが自生し、海浜植物を守る取り組みをしている石狩市とは10年以上の交流があります。

私が名取市図書館に電話をすると、菅井館長が出られました。図書館は建物が大きな被害を受け本もほとんど書架から落ちましたが、館長をはじめ職員が避難所運営や罹災証明の発行業務に出ているために、交代で2、3人しか勤務できない状況なので、非常に困っているという事でした。



支援の内容

石狩市からは2班に分けて4人ずつ8人を派遣し、4月11日から5月1日まで図書館と避難所で活動することが決まりました。図書館の整理に必要な用品は石狩から持ち込むことになり、本の梱包に必要なダンボール箱2,000個をはじめテープ、紐などを用意しました。これらの物資や支援物資は石狩市内の運送会社が配送を無料で引き受けてくれました。

第1班は、避難所を回り支援物資を届け、読み聞かせを行い、そして図書館の整理を行う準備をすることが任務となりました。そのため館長と司書と社会教育主事の資格を持つ職員、そして児童サービスの経験が豊富な司書、幼稚園教諭から図書館の児童サービス担当を経て現在は公民館に勤務する職員の4人が選ばれました。

第2班は図書館再建のための整理が任務です。メンバーは私と、図書館職員2名、そして教育委員会の部長も同行し4名の派遣です。私は、出発間際まで名取市図書館のベテラン司書柴崎さんと電話やメールで連絡を取り合い、館内の図面や整理仕様を送ってもらって、作業手順を考えました。

第1班の活動

4月11日早朝6時、図書館に市長夫妻や図書館職員が集まり第1班のメンバーを見送りました。ワゴン車に荷物を満載し、函館・青森間のフェリーに乗る以外は陸路で、到着は夜9時を回り、13時間以上かかりました。

図書館の本の整理のための用品だけではなく、市内各団体や個人からの支援物資を載せたトラックも名取に届きました。

4月12日活動を開始し、市役所で名取市長に面会した後、市内最大の避難所文化会館をはじめ各所の避難所を訪問しました。メンバーによると、おはなし会をするからいらっしゃいといういつものやり方ではなく、心に傷を負った子も多いので、一人一人に寄り添って話を聞き、心を癒すツールとして絵本も有効だったということです。このような支援では、読み聞かせの技術というより、コミュニケーション能力が何より求められるということでしょう。

そんな中で好評だったのは、石狩で伝承遊びを通して活動しているグループから寄せられた、手作りのコマ、糸電話、お手玉などのおもちゃです。うまくコマを回せない子どもたちにお年寄りたちが指導する微笑ましい光景もありました。

活動の後半、第1班のメンバーは、ボランティアの力も借りて、図書館の整理作業にも着手しました。この時、書庫に落ちていた本を書架に戻してくれたおかげで、第2班の本の選定などの作業が容易となりました。

第2班の活動

第1班は4月21日石狩に帰ってきました。私たちの第2班は車を引き継ぎ、同じ経路を22日早朝出発しました。夜高速名取インターを降りると、いきなり歩道に大きな漁船が乗り上げていて驚きました。

22日午前は図書館を見せていただき、

今後の作業の進め方を考えました。

午後は仙台市に行くため、昨日暗闇で漁船を見かけた辺りを通ると、津波が押し寄せた地域が広がり、荒涼たる光景に息を呑み、その被害の大きさを思い知らされました。

仙台では、名取市の図書館サービス再開の参考にするため、BMだけで臨時開館している仙台市民図書館に行きました。有名なメディアテークが損傷を受け、その中の図書館には立ち入る事が出来ません。運悪く雨模様だったためBMによる図書館は休館でしたが、予約受け渡しなどのため、長机1本の臨時カウンターに職員がいて対応していました。



24日からは名取市図書館の本格的な整理作業に入りました。整理作業は名取市の図書館職員、私たち石狩市からの4人だけではなく、名取市のボランティアセンターから派遣された多くのボランティアの方々、書架メーカーの(株)キハラ、そして26日からは北広島市から図書館長など2名の力強い助っ人も加わり、数多くの方々の助力で進められました。

作業は29日まで行い、30日は状況を見に来られた教育委員会の方も交え、今後についても話し合い、私たちの名取での活動を終わりました。

帰路は30日の夕刻、28日から再開した仙台港から苫小牧港へのフェリーに乗船し、5月1日の午後石狩に戻りました。

名取市図書館の概要

名取市図書館 昭和50年開館
施設は昭和33年建設の旧市役所を転用
面積 987平方メートル（2階建て）
蔵書 157,980冊

震災での被害状況

名取市は3月11日の東日本大震災で、全市に渡り被害があり、特に海岸沿いにある閑上（ゆりあげ）地区などでは津波により多くの死者、行方不明者を出しました。市内にある仙台空港も津波で大きな被害を受けました。

図書館には津波の被害はありませんでしたが、地震により各所にひび割れ、壁の剥がれ落ちなど、建物はかなりのダメージを受けました。書架の一部は損傷がひどく、倒れたものも多く、本はほとんどが落下しました。その後1階開架部分の本を書架に戻す作業を行いました。4月7日の余震で再び落下しました。

作業の内容

図書館は壁、柱に損傷を受けたために、本を2階から1階に下ろすことで、建物の危険を回避する必要があると考えました。このことは、日本図書館協会の視察で来られた岡田新一設計事務所の柳瀬寛夫氏も同じ考えでした。

作業としては、5万冊程度はある2階の本の置き場を確保するため、1階の児童書コーナーは、壁面書架以外の書架を館外に運び出し、スペースを作り、児童書は箱詰めし積み上げました。2階は、3部屋の書庫と郷土資料を含む開架などがあります。書庫の内2部屋は書架が倒壊し本の散乱もひどく、本の運び出しに危険がともないます。この2部屋については、(株)キハラのスタッフが倒壊した書架を抑えながら本を搬出し、同時に書架を解体してくれたことで、作業がスムーズに進みました。(株)キ

ハラは被災地の図書館に対し無償でスタッフを派遣し、名取においては8人が2日間作業をしてくれました。

職員、ボランティアのリレーで、書庫から2階会議室に本を移しそこで箱詰めしました。階段横の書庫の本は、階段をリレーして1階に下ろしました。開架の本はその場で箱詰めし、ダムウェーター（物品搬送のための小型エレベーター）で1階に下ろしました。

名取でもBMを使って臨時開館しようという話がありました。私は幸い建物に損傷を受けなかった書庫4と呼ばれている離れの書庫棟も、一般に開放する事を思いつきました。書庫4には古くなった小説などが置かれ、閉架として利用されています。通路が狭く通常は開架にすることはできませんが、本館は損傷が大きく、一般の人を受け入れる状況にありませんから、この書庫を利用する事になりました。

書庫4の本は古く、隙間からの砂塵で状態が悪い本がほとんどですが、その中から将来も利用する必要な本を選別しました。この作業は、ベテランの司書でなければできません。名取の柴崎司書、北広島市図書館長の新谷司書、そして私の3人で行いました。3人で意見交換しながら進める作業は、お互いの知識を出し合い、刺激になり、楽しいものです。複数の経験ある司書が選定したため、貴重な本が廃棄されることはないと思います。

選んだ本は梱包し本館に運び、残った本



は職員、ボランティア30名によるリレーで車庫に運びました。

本を運び出した書庫4はボランティアさんの手で清掃されると、見違えるほどきれいになりました。

本館の開架では、私と柴崎さんそして名取市図書館の若い司書たちで、書庫4で貸し出す約1万冊を選びました。新しい本も多い開架から本を選び出す作業には、20年以上経った本が多い書庫4の本の選別とは違い、若い司書も加わった方が良いのです。この本館の本は、またボランティアの方々の手も借りて書庫4に並べました。併せてBMの本も入れ替え、臨時開館の準備は整いました。

臨時開館

私たちが作業を行っている間も、多くの市民が来館し、いつ開館するのかと言われました。問い合わせの電話はさらに多くかかっていました。

私たちが帰って10日後の5月10日、名取市図書館は2ヶ月ぶりに開館しました。職員数が少なくなったため、火、木、土曜日の午前10時から午後2時という限定的な臨時開館ですが、問い合わせをしてきた

人たちをはじめ、きっと多くの市民に待ち望まれていたのでしょう。BMと小さな書庫だけの開館に100人以上の利用者が来られました。14日土曜日は200名以上だったそうです。

臨時開館の様子は逐次連絡をいただきましたが、笑顔で本を借りていく少女を見て、こういう顔を見るために仕事をしているのだと実感したと書いてこられた名取の職員もいます。臨時開館のたびに休憩コーナーができたり、本のリサイクルコーナーができたり、楽しい工夫をしている写真には、私も嬉しくなります。

今後図書館は建物の細かな診断がなされると思いますが、損傷を考えると本格的なサービスを展開できるようになるためには、移転場所の確保を含め様々なハードルがあるでしょう。しかし市全体の復興が進む中で、いつか素晴らしい図書館が出来ると思っています。その時のために、今回梱包した箱には、どんな本が入っているかわかるように、石狩で作っていった分類などの情報が書かれた紙を貼りました。効率的に配架作業ができるこの紙が役立ってくれる事を祈っています。

3月11日の東日本大震災には、菅原先生も衝撃を受け、そしてほとんどの図書館人同様、東北の図書館の状況に大変心を傷めておられました。そのような中、石狩市民図書館のメンバーが被災地の名取市に入り、図書館を復旧していく様子を、毎日ホームページで紹介しましたが、それをご覧になって、悲惨な状況の中、一服の清涼剤のようだと私にメールを送ってくれました。

この原稿は、名取から帰ってきてすぐ、その活動をまとめて「としょかん村」に寄稿して欲しいと先生から依頼されて書いたものです。5月の下旬メールで送信すると、受け取ったというメールがあり、今はとても忙しいので、6月に入ったらまた連絡するということでした。忙しいという先生が、まさかそれからひと月もたたずに急逝されるとは思ってもいませんでした。

その後、名取市との交流は続き、今この活動を書くとも内容は変わりますが、先生が読まれた原稿をそのまま載せさせていただくことにしました。

(にわ・ひでと／としょかん村友人／石狩市民図書館)

としょかんへの旅

～菅原峻先生との旅・図書館との出会い～

片山睦美

オリーブの実

私がこの「としょかん村」へ書かせていただくのは今回が初めてで、そして最後になってしまいました。菅原先生から私に「としょかん村」への原稿依頼メールが届いたのが昨年、2010年の暮れでした。「あなたと図書館とのつながりは大変にユニークなので、書いてみてくれませんか」と。

私は光栄に思いながらも、その時期にパソコントラブルを抱えていたこともあり、掲載を次号に延ばしていただけるなら、ということでお受けしました。そして菅原先生との旅など、あれこれ思い出しながら書き上げた原稿を2011年5月にメール添付で送付したところ、「今、チョイと体調不良です。また連絡しますね。あなたも大切に」とのお返事。

結局このメールが菅原先生との最後の「交信」になってしまいました。

あまりに突然のお別れ。昨年3月の東日本大震災での出来事だけでなく、毎日、元気に「今日という日」を迎えることができることは奇跡に近いのかも、という思いを強く感じる辛い一年でした。

お送りした原稿は宙ぶらりんのままでしたが、私が「図書館」に関わりをもつきっかけを与えてくださった菅原先生について、先生との旅の思い出も含めて、いずれどなたかにお伝えできればと願っております。「願えば叶う」のですね。今回の機会を与えてくださった皆様、本当にありがとうございます。

ギリシャの諺に「根を生やしたオリーブの木には多くの実がなるものだ」というのがあります。どれほど乾いた大地であろうとも、オリーブはいったん根づいてしまえば、たくましく枝葉を広げて多くの実をつけ、収穫をもたらしてくれる。ひ



「900マイルアメリカ公共図書館の旅」1982年

とつの種がいつしか枝葉を伸ばし、多くの実を連ねる。当然、良い実も、そして悪い実もできる。でもそれはその地に根付いた証拠でもある、という喩としてギリシャの人々は使うそうです。

「熟成したオリーブの実（経過した時間だけは熟成の部類）」になったかどうか、心もたなくはありますが、最終号ということでもありますので、菅原先生と「図書館の旅」を共にさせていただいた思い出も辿りながら、私の「図書館事始め(ことはじめ)」を紹介したいと思います。

機縁

初対面の方から「お仕事は？」と聞かれると、最近「通訳ガイドや図書館ツアーコーディネーターを」と答えることにしています。そうすると「図書館関係のお仕事をされていたの？」と聞かれるので「いいえ。一利用者にすぎません」と申し上げると、相手の顔に「??？」が浮かびます。

図書館ツアーコーディネーターとは、「海外の図書館を見学したいので手配してほしい」というリクエストに応じて、視察の手配や同行通訳をおこなうニッチビジネスととらえています。過去の図書館視察ツアーで訪問した国は、スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、アイスランド、フィンランド、エストニア、オランダ、ベルギー、ドイツ、アメリカ、カナダの11か国。いずれのツアー

も1日2館は見学する「図書館どっぷり」ツアーで、旅程に載っていないでも「ついでだから」「地図で見ると近そうだから」と見学先を増やす、どちらかというとなマニャックなツアーかもしれません。

「カミカゼツアー」、実はこれは1992年の菅原先生主宰の「アメリカ図書館の旅」に対して、訪問先のライブラリアンが名づけてくれたものです。

92年の「菅原ツアー」は私が添乗員兼通訳として初めて参加したものでした。20名の図書館員や建築家たちが10日間でアメリカの図書館10館を視察。厳寒の2月のシカゴを皮切りに、初夏のアトランタからアラバマ州バーミングハム、半袖で廻ったオーランド、雪のデンバーと吹雪のコロラドスプリングス、再び初夏のロサンゼルス。広大なアメリカ、時差もあれば気候も違う土地を文字通り飛び回った、「アメリカ横断ウルトラクイズ」もどきの気力と体力勝負のツアー、いや「合宿」でした。

海外の図書館訪問ツアーが、図書館の一利用者である私のライフワークのようになってきたきっかけは、まさしくこの92年の「体育会系合宿」ツアーでした。

菅原先生が海外図書館視察の団長から退かれても、評判の良い図書館があると聞けばツアーが組めないかと考え、個人旅行の途中でもその地域の図書館に立ち寄ってしまうように私を変えたツアーでした。

図書館を見ればその自治体がよくわかるといわれます。魅力ある街にマッチした素敵な図書館を見つけた時の楽しい驚きを味わいたい、皆と分かち合いたいというのが図書館ツアーを企画する原動力となります。

しかし現在ではインターネットを利用し訪問先とメールでのやり取りが可能になり、事前に詳細な情報や画像で目的の図書館をバーチャル体験できるようになってきました。見てきたような気になった分、「新鮮な驚き」は少なくなっているかもしれません。

しかしそれを凌駕するのが街や人との実際の出会いだと思います。現地の図書館員との出会いは

もちろんのこと、旅の同行者と共有する時間が素晴らしいのです。現地に出向き、土地の匂いや驚きを一人でも多くの人と分かち合うワクワク感はずっと強くなっています。その喜びを教えてくださいましたきっかけ、機縁が、菅原先生が主宰された図書館視察ツアーでした。

図書館に縁がまったくなかった私に、「図書館見学」という言葉がインプットされたのは「92年ツアー」より10年も前、1982年の「900マイルアメリカ公共図書館の旅」でした。

1982年10月に22名で10日間、アメリカ西部の公共図書館を専用バスで巡るという、十分にマニャックな内容のツアーに参加した（させられた？）時に一つの種が蒔かれたようです。

「菅原ツアー」の主たる参加者は、図書館司書、建築家、家具デザイナー、文庫や友の会で活動をされる方々です。旅先では「なんでも見てやろう」と好奇心いっぱい、寸暇を惜しんで街に散っていきます。夜遅くまで誰かの部屋に集まっては続く図書館談義。図書館をキーワードに集まった者同士の「化学反応」で、旅の楽しさ、奥深さが倍増するのが「図書館視察ツアー」のマジック。まさに「図書館は出会いの場」となるのです。

今年6月、菅原先生の突然の逝去の訃報を知り、なるべく早く「偲ぶ会」を個人的に開催できないかと思っていました。どのような形がいいのかを考えました。私が存じ上げているのは「図書館ツアー」での菅原先生。それならば、と「菅原先生主宰の海外図書館ツアーに参加され“同じホテルの飯を食った”仲間の皆さん、『偲ぶ会』をしませんか」と呼びかけました。「公式の偲ぶ会」は後日開催されると聞いていたので、私たちの集いは、居酒屋のようなところで「菅原先生との旅の思い出を語る」同窓会的な集いにしたいと思いました。「菅原ツアー」皆勤賞の柏図書館の小館さんには、旅の写真を何枚か引き延ばして当日持ってきていただくようお願いもしました。そして「旅仲間で菅原先生を偲ぶ会」当日の9月10日には25名の旅の仲間（完熟した良いオリーブの実たち、です）が集まりました。西川先生が献杯のご挨拶をされた後、参加者それぞれの思い出

話が披露されるにつれ、「ああ、本当に菅原先生はもういらっしやらないんだ」という、区切り感とでも呼べるような思いがこみあげてきました。

私にとって機縁となった1982年の「図書館の旅」ですが、菅原先生と「図書館仲間」に巡り合う前の私の状態も少しお話したく思います。

図書館は縁遠く

私が生まれたのは大分市で高校卒業まで住んでいました。本を読むことが好きな子どもではありませんでしたが、公共図書館は縁遠い施設でした。

たまに利用していた大分県立図書館は、「郷土の誇る建築家・磯崎新設計」と常に説明されるモニュメンタルな建物。私や友人たちは、時々入館しては異空間の匂いをかいだり、夏休み中の勉強場所として利用する程度で、「敷居の高い施設」であり続けました。

実は1982年の「菅原ツアー」には、その当時、大分県立図書館に勤務していた私の父が初参加しました。父の旅の記録によると「人口が大分市とほぼ同じポートランド市（オレゴン州）の図書館の蔵書数は110万冊。大分市の6万冊はおろか、県立大分図書館の26万冊に比べても格段の差」との驚きと嘆きがつづられています。

高校卒業後は大学進学で東京に移り住みましたが、利用したのは大学の図書館のみ。そこは神聖な雰囲気のある蔵書資料の保管庫という印象で、試験前だけ利用する「有事の時」の図書館利用者のままでした。

仕事部屋となった図書館

図書館に縁遠かった私が頻繁に図書館を利用するようになったのは、仕事でアメリカに渡ってからのことです。

2010年に86歳で亡くなった国際ジャーナリスト、大森実氏のもとで助手として仕事をした南カリフォルニア在住時代に初めて、本格的な「図書館利用者」、それもヘビーユーザーとなりました。1980年のことでしたが、アメリカの現代史を執筆する大森氏のために資料を探す毎日でした。車で20分ほどのところにあった州立大

学（カリフォルニア州立大学アーバイン校）図書館にずいぶんお世話になりました。

毎日新聞の外信部長だった大森氏は、自分の文章の一字一句に大変なこだわりを持つ方でした。自我も強烈で、伝聞を嫌い、あいまいな情報は徹底的に「本当にこれは正しいのか」と確認され、詰問され、そのたびに大慌てで図書館に向かう日々でした。

大学図書館にある膨大な資料を前にして気が付いたことがあります。それは「図書館は資料の宝庫」ではありますが、その眠る宝を生きた宝として紹介してくれるのがライブラリアンなのだということ。彼らは求める資料を的確に探し出してくれる水先案内人で、彼らのおかげで英語の資料を読み込む深さやスピード、さらにはエネルギーが保てたと感謝の言葉もないほどに助けていただきました。

今のようにインターネットを利用した検索ができなかった時代、歴史的事実ひとつを確認するのも、ライブラリアンの手助けなしには書架の前に茫然と立ちすくむだけでした。彼らの仕事の手際よさや親切心、プロフェッショナルリズムのおかげで、図書館の存在の素晴らしさや有難さがより実感できたと思っています。

とはいえ、図書館は「リラックスするために訪れる場所」ではなく、私にとって図書館はあくまでも仕事場の延長で、調査・研究・学習のために利用する”効率優先“の施設であり続けたのです。

「図書館ツアー」って？

私の「図書館感」が少し変わったのが、1982年に菅原先生主宰の「図書館視察ツアー」に同行した（私の中では“させられた”）ことでした。

前にも述べましたが、当時、大分県立図書館勤務の父から「アメリカの図書館を巡るツアーと一緒に行かないか」との誘いがありました。一度くらい父親と旅をするのも悪くないかとの軽い気持ちで私は参加を決め、私が住んでいたロサンゼルスからツアー一行が到着するシアトルへ飛びました。ちょうど日本への帰国を決めた時期で時間の余裕もあり、「アメリカの図書館視察」には特段

の興味はなかったものの、訪問個所がカリフォルニア州に住んでいても聞いたことがないような「田舎」であるのが一番の魅力、という、今思えばずいぶんと「浮いた」参加者でした。

シアトルのタコマ空港で、父を含めたツアー参加者22名と合流し、ワシントン州、オレゴン州、そして最終訪問地のカリフォルニア州サンフランシスコまで、公共図書館9館をバスで南下しながら訪問するという旅程。それも風光明媚な海岸沿いルートではなく、わざわざ山の中を走るという十分に風変わりなツアーでした。

訪れた公共図書館はどこも私たちを大歓迎してくれました。私はまったくの「部外者」でしたが、視察時、訪問人数が22名と多すぎるため二つのグループに分けられ、私に突如通訳としての役目が申し付けられたということもあり、徐々に「図書館仲間」デビュー。慣れない図書館用語にとまどいながらも、今思い返すと、本当に「古き良きアメリカの時代」「余裕があり温かいアメリカ人」の対応を受けたと思います。

当時、私はロサンゼルス郊外にある教会の一室を借りて住んでいましたが、この旅で訪問した小さな図書館で出会った人々は、教会に集まる人々の印象と重なりました。図書館も教会もコミュニケーションを求める人々が集う場所だと。

まさに「図書館ねこデューイ」（ヴィッキー・マキロン著・早川書房 2008年）の世界。この本が書かれた舞台はアイオワ州にある図書館でしたが、著者の館長が述べている図書館論～「りっぱな図書館は大きかったり美しかったりする必要はない。最高の設備とか、非常に有能なスタッフとか、最高の利用者は必要ない。りっぱな図書館は必要なものを与えてくれる。地域社会の生活にすっかり溶け込んでいるので、かけがえのない存在になっている。いつもそこにあるので誰も気づかないのが、りっぱな図書館だ。そしてみんなが必要とするものを常に与えてくれる。」(p.134)

この精神、雰囲気は訪問図書館で十分に感じることができました。どの図書館も「町のサロン」として定着しており、図書館に行くのを目的とし、滞在を楽しむ。「完全に生活の一部となっている

ね」と菅原先生がおっしゃっていたのを思い出します。そしてどの図書館でも「友の会活動」が活発でした。これもキリスト教に基づいた奉仕精神、隣人愛精神が根付いていた「古き良き」アメリカ社会ならではかも。（後年、北欧の図書館を訪問した時に、「図書館にはボランティアはいません。必要であれば行政が人を雇います」と言われたことを思い出します）

当時、大森氏の執筆のために「鉄鋼王カーネギー」の情報も集めていましたが、資本主義者だった彼がアメリカやイギリスの小さな町々に数多くの図書館を設置するための寄付をしていたことは知りませんでした。図書館に「縁」ができて、再度、カーネギーについて書かれたものを読むと、貧しいスコットランド移民の子として生まれた彼が「移民がアメリカの文化を学ぶことができるのは図書館である」「アメリカの実力主義は図書館で育てられる」と信じたからだとか。

英語ができない移民が多い地域の図書館では、無料の英語クラスが多く開催されていました。図書館は地域のニーズに沿った社会施設の役割を十分果たしていたのだと思います。日本と比べると住民のタックス・ペイヤーとしての意識がとてもしっかりしているので、サービスを受けるのは当然、と思っていたのかもしれませんが。（この状況は北欧の図書館もまったく同じでした）

世界大恐慌の時、ニューヨーク公共図書館の入口付近にこんなポスターが貼ってあったそうです。「自殺をするな。図書館にいこう」と。

図書館的日々

この思いがけず楽しい「図書館開眼」の旅が終わり、その数か月後に私の米国滞在も終了となり、東京に戻りました。その後、結婚、出産を経て、引っ越した近所に区立図書館の分館ができ、娘を連れて毎日図書館に通うようになりました。ようやく肩肘を張らない、「生活の一部となった」図書館との付き合いが始まったのです。菅原先生によって蒔かれた種から双葉が出た、というべきでしょうか、これは。

夫の仕事の関係でバンクーバー（カナダ）やシ

ンガポールに引っ越すと、まずは近所の図書館をチェックしたという行動からみると、蒔かれた種は根を生やし、双葉からさらに育っていったようです。

実はカナダに引っ越す日（1993年5月）と、菅原先生の「白夜の国の図書館」シリーズ第1回のツアー出発日が重なり、お誘いをいただきながらも残念ながらあきらめた経緯がありました。

バンクーバーには5年間の滞在予定だったため、私なりにこの地の図書館を楽しもうと決めて渡加しました。

当時は娘が小学生だったということもあり、学校図書館や地域の図書館が主催する各種の文化行事にも積極的に参加していましたが、何より強烈な思い出は、当時小学生の娘宛に「延滞料25ドル」（約2千円）の請求書が届いたこと。

「図書館の本は住民の共有財産」、このことは米国の図書館見学を通じて、頭では理解できていたつもりでしたが、利用する者の義務を痛感させられた情けない出来事ではありました……。

それはさておき、バンクーバーでは1995年、新市立図書館（設計モシェ・サフディ）が開館しました。ローマのコロッセオのような外観も私たちをワクワクさせてくれましたが、それ以上に心に残っているのはオープニングの日、旧図書館から新図書館へつながる道路上に市民がずらりと並び、本をリレーで旧図書館から新図書館に運んだことです。市民と図書館の距離の近さを感じるイベントとして懐かしく思い出されます。

北欧図書館ツアーで

思いがけず嬉しいことに、1995年に菅原先生から「バンクーバーから、次の《北欧図書館の旅》に添乗員兼通訳として参加していただけますか」とのオファーがありました。もちろん快諾！

行先は、スウェーデンとノルウェー。さらに1996年にはデンマークとアイスランドの図書館の旅にも参加させていただきました。

北欧諸国は、世界の図書館界のリーダー格と菅原先生から伺っていましたが、北米の図書館しか知らない私にとっては、非常に学ぶことの多い

「北欧図書館ツアー」となりました。

メンバーは菅原団長以下、図書館員、建築家、図書館家具デザイナー、友の会の方々など、お馴染みの熱心なメンバーたち。

移動中のバスの中で、いつも「一つとして同じ顔をした図書館はないねえ」とおっしゃっていた菅原先生。

確かにアットホームで、日々の生活に直接続いていることが感じられる図書館が多く、本を貸し出すのが中心の日本の図書館と、居心地の良い北欧の図書館の差はなんだろうと、参加者同士で熱く語り合った思い出も懐かしいものです。

菅原先生主宰の「海外図書館ツアー」では、菅原先生とJTB担当者が現地と連絡をとり、日程や訪問館すべてを決定した後で、私が通訳兼添乗員として参加する、というのが基本形でした。

私はカナダから現地参加のため、事前学習も十分ではなく、訪問館の事情もほとんどわからないままの「猪突猛進」「当たって砕けろ」精神で、今もって冷や汗ものです。

ただし1992年の「カミカゼツアー」の反省からか、原則として1都市2泊以上の「ゆったり視察プログラム」を組んでくださったことや、今では考えられない3週間近いツアー日程など、「寄り道」や「アドリブ」が楽しめるツアーでもありました。参加者も現役の若い図書館員の参加が多く、今思うと、本当にゆとりのあった時代だったと思います。

北米の図書館見学や利用時は、「効率性」に感心していた私でしたが、北欧では、効率性にプラスして「心豊かな空間づくり」に魅せられました。建築も記憶に残るデザインが多かったように思います。もっとも「北欧」とひとくくりにはできず、スカンジナビア半島の国とデンマークでは印象がまるで違いました。スウェーデンやノルウェーでは、「カナダに戻ってきた」ような懐かしさを覚えましたが、重厚な建物が多かったコペンハーゲンは紛れもなく「ヨーロッパ」の匂いがした、と。

印象的な訪問地の一つとして、デンマークのエトランド半島先端にあるスケーエン（skagen）があります。この地での図書館視察はなかったので

すが、デンマーク図書館局の方に勧められ、夕陽を見るためだけにバスを走らせ、北海とバルト海の二つの海が会う寒村のリゾート地へ向かいました。スケーエンのレストランではオールボー大学のイーヴァルト先生と会食。しかし沈む夕陽が気になるツアー参加者の面々は、先生との会食中も、三々五々、テーブルを離れては夕陽の沈み具合をチェック。イーヴァルト先生と同じテーブルに着いていた菅原先生と私は壮大な夕陽を見逃してしまい、思わず顔を見合わせたため息をついたことを思い出します。

とはいえツアー中の私は、予定通りのツアー遂行と視察先での通訳で頭がいっぱいで、あまり細かい点までは記憶に残っていません。通訳しているときは「今」だけに集中しているため、あとで「あの時は何と？」と聞かれてもすっぼりと記憶が抜け落ちている、ということがよくあります。「北欧のどこの国民が英語が一番上手だったか」ということであれば自信をもって言えるのですが、図書館の全体像についてはおぼろな記憶しかないので、帰国後、菅原先生が参加者に“書かせて”出版された記録集がとても貴重な資料となっています。

例えば、フィンランドやスウェーデンでは「図書館に対する建築家の熱意」が感じられたが、デンマークにはそれが感じられなかった、と建築家の方々の評判がよくなかった、というのも記録集を読んで初めて気が付いたことでした。

菅原先生の「北欧図書館ツアー」シリーズ最後の訪問国、アイスランドも印象的でした。デンマークの空港で私のバッグが置き引きにあい、カメラはあきらめたものの、コート無しで9月下旬のアイスランドに渡らなければならない事実気分が滅入ったスタートとなりました。

首都レイキャビクの空港に到着した我々はまず巨大露天風呂の「ブルーラグーン」で温泉に浸かったのです。ところが参加者の一人が白濁した湯の中に義歯を落として大慌て。先日の「旅仲間菅原先生を偲ぶ会」では笑い話として大いに盛り上がりましたが、レイキャビクの歯医者に駆け込んだ稀有な日本人になったことは間違いありません。

4日間滞在したアイスランドは国の人口30万人弱。首都の街並みは整然としており、白い壁にカラフルな屋根の家々。モダンなデザインの公共建築が多いのが印象的でした。学校図書館も数多く見学しましたが、国立図書館を訪問したときに、書架に並ぶ本の大半は英語の本だということに気づきました。

「アイスランド語の行く末に心配はないですか?」と副館長に質問したとき、「少ない人口ではありますが、アイスランド語が消えゆく言葉とは思っていません」と力をこめておっしゃったことをよく覚えています。「文化に対する自負心を感じるね」との菅原先生のコメントも。



一粒のオリーブの実として

菅原先生とは米国と北欧の図書館ツアーにそれぞれ2回ずつ、合計4回一緒に旅をさせていただきました。わずか4回ではありますが、実に濃く充実した時間でした。

デンマークでの最後の夜、菅原先生の古希をお祝いする「サプライズパーティ」を開きました。

その席で先生は「日本にはライブラリーシステムとよべるものがないよ」「図書館員の質、専門性が違いすぎるよ」「必要なのは人づくりだなあ」との持論の後で、「海外の図書館をたくさん見る、ということは、つまりは日本の図書館のことをたくさん考える、ってということなんですよ」としみじみおっしゃいました。その声は今も耳に残っています。

菅原ファームから育った一粒のオリーブの実として、これからもまだ見ぬ図書館へ思いを馳せ、ワクワクする図書館を探したい、訪れてみたいとの思いを強くしているところです。

(かたやま・むつみ／としょかん村友人

図書館ツアーコーディネーター)

図書館に惚れ込んだ人

菅野青顔私記 ⑩

荒木英夫

14 足跡を残して

保存された蔵書

全く古今未曾有の大津波で氣仙沼市街の大部分は壊滅してしまった。氣仙沼は明治以来二度の大火で町の中心部を全焼したことはあるが、明治29、昭和8年の二度の三陸大海嘯ではその後合併で市域となった周辺地区に被害を与えただけで、中心市街には被害が無かったから、市民もやや津波には警戒を怠っていた気味もある。

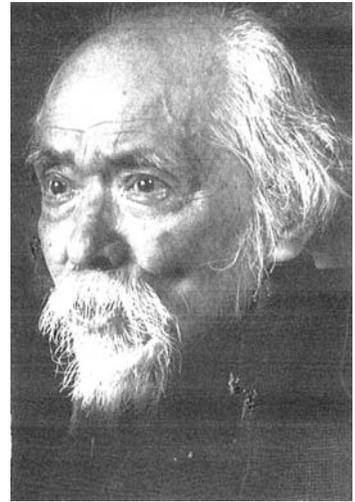
昭和8年の大火で当時の氣仙沼町の大部分を焼失して以来約80年にわたり住民が築いてきた大部分のものが、30分かそこから瓦礫の山と化した、誠に人力など自然力に比べたらマッチ捧にも等しいものである。

幸い氣仙沼市図書館は若干の建物亀裂と図書破損、ブックモビルの故障（使用不能）があっただけで済んだ。

それについても、図書館新築の時、岡の上では利用には不便だから市街地に下ろすべきだと市民の声があり、職員も主張したが、青顔が反対で現在地に建てられたが、その後も起きては消えた市街地への移転計画など実現していたら貴重書、再入手不能な郷土資料の全ては間違いなく消えていただろうと思われ、これはどう見ても青顔の勝である。

権力に逆らうとは

今まで述べたように、青顔は権力を恐れず自分の思うままに行動し、市民からは「青顔は幸福な人だ、何を語っても、何を



やっても通るからね」と言う声も聴かれた。

例えば、図書館は教育委員会に属しているから、教育長は制度上上司と言うことになるが青顔はそんなことは一向に構わないのである。

教育委員会とは学校だけでなく図書館はじめ社会教育から文化行政一般を管轄するものだ。なぜ古手の校長ばかり教育長にするのか。校長などは上に迎合して出世した奴ではないか。そんな者に教育の独立性など主張できるはずはないと言う。

ある時、肌の合わない人物が教育長に選ばれ新任挨拶にきたら「俺は本当はアンタなんかには教育長になって欲しくはないが、なった以上は一生懸命やれ。何もやらなくてもいいから図書館のことは忘れては駄目でガスゾ」と言い放った人である。

直情で、気に食わないと怒声し、だが人情に厚く、そうして案外、臆病で気が弱く、寂しがり屋、照れ屋の一面があり、酒に酔った時など自己嫌悪みたいなことを言い出し、この人がと意外に思うこともあった。

新図書館が出来た頃、地元紙に書いた「わが理想の図書館」という一文の末尾にこれまでの自分の図書館での苦労を述べている部分がある。そこには若い頃、辻潤の感化で、大野雲潭の「老荘講義」を読み、内外の老子書を集め、お陰で「地震」以外にこ

の世に恐るるものはない境地に到ったとあるが、大の地震嫌いで、少し揺れるとすぐ庭に逃げ出したものである。

職員に物怖じをしない者がいて、青顔は自分に似ていると思ってか大目に見ていたが、ある時図に乗って失礼な態度をとったことがあった。青顔は怒りつけず「君は市長の前でも総理大臣の前でも同じことが出来るか、出来るなら君に頭を下げる。出来ないならそういうことは止めろ。俺は大臣でも天皇の前でも自分を通す心算だ。それは権力に軽々しく迎合してはならないと言う信念でやっているのだから、出鱈目でやっているわけではない」と言ったことがあった。かなり勇気を出して信念を通していたのではないかと思う。

図書館を去る

しかし図書館が新築された頃から青顔に対する風当たりが強くなった。図書館を育てた功績は分るが、一度退職した特定の人物を非常勤嘱託で長く置くのは如何なるものか。新館落成を花道として退職するのが有終の美を飾ることになると様ざまだったが、嘱託とはいえ、市の職員が地元「三陸新報」のコラム「万有流転」を担当しているのは兼職ではないのかが一番非難の的だったようである。ことにしばしば激語毒舌で市政を批判するから、不快を感じている市会議員も多かった。

青顔は、図書館長とは只の公務員ではなく市の文化の長であり、それだけの見識を持たなければならず、市民に自分の意見を発表するのは当たり前だと意にも介さないし、またそのような空気の中で青顔に自由に執筆させた浅倉橋男三陸新報社長も大物であった。

だが反市長の立場をとっているライバル紙「宮城タイムス」が市政批判の一つの種類としてしばしば図書館長問題を取り上げ、市政を批判するなら野にあってすべきだと

攻撃し、市会議員からも図書館長は専任にすべきだとの意見も出だした（この15年来、図書館長は無資格非常勤嘱託となり、市議会も納得しているが、当時の意見のように専任制に賛成して欲しいものだ）

その一方、「やはり図書館の顔は青顔さんだ」との人氣も市民の間には深くあった。

青顔は国歌とは国民が歌いたいから歌うもので、他から強制されるものではないとの持論を持ち「そんなもので愛国心が決められるか、歌わなくても自分の国が好きになるのは人間の自然の感情だ」と言っていた。

昭和53年5月4日付け「万有流転」に「戦後、お相撲さんの歌と称されている君が代が歌われるあらゆる式場に出ないことにしてきた。それで、市制25周年式典にも参加しなかった」と書いたところ、「宮城タイムス」紙から「市の主催する式典に参加したくないのなら市の職員を辞めるべきだ」と攻撃された。

青顔特有の毒舌だが、保守的気風の残っている土地柄だけに賛同するものもあり、市議会で質問を受けた教育長は神道の家柄でもあったためか、職員として不適当な言葉と答弁し、翌日の「タイムス」紙に大きく報道された。

厄介なことになったと、出勤した青顔に記事を見せたら、一言「昔から図書館はこうではなかったのだぞ」と漏らした。ストーブも、トイレもないどころか、古本古雑誌しかなく、雨が降れば一人で雨漏りの跡片付けをしたボロ図書館をここまで仕上げたのは誰だ、市会議員が一体、図書館の何を知り、何をしてくれたか。その苦労がお前たちに判ってたまるか。今さら大きな口をたたくなと言う憤りと無念が、この一語にこめられていたと思う。

数日して職員を集め、「俺は辞めるから、後はお前たち力をあわせやってくれ」と言い、辞表を明日教育委員会に届けろと言う

から「館長はすぐ腹を立てるからいけません」と止めたのだが、どうしても届けろとの命令だし、翌朝の「万有流転」に、図書館長が新聞に意見を発表するのは当然だが、菅野青顔は今日限りで館長を辞するから安心しろと言う旨の退職宣言を書いたので、辞表を届けざるを得なくなった。

こうして「図書館に惚れ込んだ」人は、昭和53年7月を以って、36年8ヶ月の図書館生活から去っていった。

夢幻洞青顔

退職した青顔は、以後町に出ることもなく夢幻洞と称した自宅に籠もりきりで、1万冊に及ぶ蔵書に囲まれ、以後も「万有流転」を書き続けた。

無二の愛書家であるから、その蔵書は今となっては入手困難な名著珍籍が多かったし、実によく整理されていた。なんでも保

存しておけば何時かは資料として役立つと、小冊子は勿論、たとえば図書館大会に行けば、懇親会の箸袋の末までスクラップブックに貼り付けて保存しているほどだった。



晩年になって、これは図書館に保存してくれと出入りの書店の車に頼んで蔵書を寄付してくれたので、「青顔文庫」の棚を設けて保存していたが、ある時、菊の模様のダンボール箱に荷風の「瀬東綺譚」の切抜きが袋に入っていたはずだと聞かれた。そんなものは有りませんでしたといっても、間違い無い、ただの紙屑と思って捨てたのではないか、資料を粗末にする奴など不愉快だ、見つかるまで家に来るなど叱られた。

資料の整理と記憶には間違いのない人だが、無いものはないのだから、しばらく家に行けなくなり、長年の付き合いに水が入ったように困ったことになったと思った。

3ヶ月ほど経って、また本を寄贈して来た中に菊の花模様の箱があったから若しやとあけてみたら中から見つけた。「有りましたよ、叱られたから敷居が高くてこられませんでした」と少々嫌味を言ったら、「口うるさいのはお前も知っている通りだ、気にしないで来ればいい」とあっさりしたもので、ともかく仲直りが出来てほっとした。



ところがその1ヶ月ほど後、突然「万有流転」執筆は本日でやめるとの記事が出た。熱が出て体調が優れず、入院したと言う。医者嫌いの青顔にしては大事件である。

退院はしたものの体調は優れないようであった。それでも時々奥さんの電話を通じ、寄付した何々と言う本を読み返したいから持ってきてくれと読書欲は旺盛だった。

しかし段々、届けてもすぐ返すようになってきた。本を持つ力が無くなってきたと言う奥さんの話で、人工衛星アポロが月に着陸したとき「科学の発展で月に人類が行けるのもいいが年をとらない薬は出来ないものかね。本が読めなくなったら俺は生きている意味がないよ」と言っていたのを思い出して、寂しい気持ちになった。

青顔が世を去ったのは、平成2年1月21日で87歳だった。俺の家系は長生きだから90歳以上は生きると常に豪語していたし、意外だった。

青顔はよく冗談に俺の葬式には大雨を降らせて誰も来ないようにしてやる。それでも来る奴だけ来れば沢山だと言っていた。冬の最中だから大雨は降るまいと思ったら、通夜の晩から車も通れないほどの豪雪になり、最後までへそ曲がりの青顔らしいなどといわれた。

墓石には「夢幻洞」と刻まれ、没後、有志によって『追悼菅野青顔を語る』が編集された。また胸像が造られて今も閲覧室の一角で惚れ込んだ図書館を睥睨している。

図書館の原点とは

青顔は「図書館の権威」を好んで口にし、図書館の仕事の中心は研究調査に来る人への資料提供で、何を聞かれても応えられる蔵書構成と資料に通じた職員がいることを理想としていた。従って参考業務には熱心だが、一般市民への読書奉仕には、職員任せで、自身としてはあまり積極的ではなく図書館の運営は旧式でも良いと言っていて、

一般住民に積極的に奉仕しても家計から読書費の軽減にはなるが、文化の向上にはならないと言っていた元前橋図書館長渋谷国忠の考えに近いものがあった。(事実、渋谷とは辻潤と萩原朔太郎の研究で親しく文通していた。)

これは住民への貸出しを図書館の最重要な奉仕活動とする現在の「中小路線」とは方向を異にする考えである。

ただし児童奉仕には理解があり、今まで本を読まなかった大人にいまさら読書を勧めるより、将来利用者となる児童に読書慣習をつけるほうが大事だとの考えだった。

現在の公立図書館が住民の利用サービスに心を配り、貸出し、館外奉仕に力を入れて利用者を飛躍的に増やし、社会に広く根を下ろした功績は否定できない。

しかし一方「公営貸本屋」などと言われ、行政側から本を貸すだけなら別に専門職員は不要ではないかと誤った考えを持たせ、経費節減だけのメリットで無資格館長の採用、頭数揃えだけのアルバイト職員の雇用、民間への業務委託などが進んでいるのではないか。

機器の採用、図書整理の外部委託も進み、職員の業務内容も大きく変わってきているが、さらに短期間の職員異動によって資料に対する知識が低くなってきているような気もするし、腰掛仕事になり、情熱も薄れ専門性とは何か問われる時期に来ているのではなかろうか。

図書館とは何かとの観念が薄れ、外部からの圧力で、自由性、独自性が侵されていることも将来に問題を残している。

図書館に対する行政の理解がまだ少ない日本の社会においては、まさに図書館にほれ込んで図書館の原点と自由性を強力に主張した青顔の直情は見直されても良いのではなかろうか。(完)

(あらかき・ひでお／としよかん村同人

元気仙沼市図書館長)

としょかん物見台 10

石狩市民図書館の開設に関わって・続々々 (完)

石沢 修

「としょかん村」村長の

故菅原峻さんが言っていたこと

菅原峻さんのご逝去は残念でなりません。心からご冥福をお祈りします。

菅原さんは図書館コンサルタントという日本で唯一の仕事を始められました。菅原さんと関わった人と自治体は北海道から沖縄へと全国に至っています。菅原さんはいつも図書館づくりは、図書館を始める段階からが重要だと常日頃、話されていました。

菅原さんは全国で数多く手がけた中で特に故郷の北海道八雲町に図書館改築計画が持ち上がった時、“手がけたい”と思っていたことと思います。縁が無かったのか、実現しなかった時は、ちょっと寂しそうでした。

私とは石狩市の「基本構想策定」が終わった以降の基本計画からの繋がりでした。本当は基本構想策定前から一緒に作っていくことが出来たらもっといいものになったと思っています。そして苦勞して出来上がった基本計画ですから、次なるものはその計画を設計に反映させていく設計者選定とその進め方でした。色々なやり取りの末、「プロポーザル」方式となりました。

設計者選定には「プロポーザル方式」、設計競技（コンペ）がありますが、一般公募をして広く、応募者にチャンスを与えることが図書館設計の進歩につながるのだと思います。

コンペは設計図面のみならず、模型も提出しますので提案されたものの特徴や提案

者の図書館に対する思いが表れています。コンペが一番分かりやすかったと思っており、そこがちょっと残念です。

設計者が決まっても設計者にお任せでなく、自分の家を建てるがごとく、こだわることが重要で設計者はそれを待ち望んでいるのです。

愚直な言い方ですが、基本計画を100%実現していく気持ちが最も大切だと思います。しかし、オープン時には50%位の進捗度だったかなと思っています。

図書館が誕生する時は、人間のように赤ちゃんが産まれるのと同じです。その図書館が1年後に一足飛びに20歳にはなりません。図書館の成熟度は人間にも似ています。1年で1歳くらいに値するのではないのでしょうか。ですから、それを育てていくことに性急にならないようにしていかなければ変な方向に行きますので注意が必要です。

菅原さんはこんなことも言っていました。その町の図書館の成否は分相応もあると。

それは自治体や住民が図書館に熱心ならば熱を帯びたものになるが、自治体や住民に関心が無いところは、それ相応のものになるということです。

折角、税金を投じて図書館を作ろうとするのに腰が引けた考えで、自らあれもしない、これもしない、余計なことはしないという考えは住民に対しての大きな背信行為ではないでしょうか。

菅原峻さんに感謝。

(いしざわ・おさむ／としょかん村同人

元石狩市民図書館長／共和町教育委員会)

「図書館をはじめる」一歩

堀江三千代

2011年3月、Aさんからの相談により、私と当別小学校のお母さんたちは当別小学校の図書室整理をすることになりました。

以下はAさんから寄せられた感想の一部です。

「当別小学校の読みきかせに参加して7年目。この小学校の卒業生なのに、こんなに図書室に長時間いたのは初めてでした。

小学校の耐震補強工事や、教室の床張り替えにより図書室の本を一時的に抜き出し、先生たち自らが戻したといえども本棚の本は見事に横積み・はみ出し・ギューギュー詰め・見るにみかねて整理しようと声を上げたもののノウハウがなく、絵本のタイトル順に並ぶ本を見てもどうしたら良いのか分からず、当別こども図書館の堀江さんに相談したのですが予想以上の大仕事になりました。

…中略…単純作業が多いように思っていました、実に頭を悩ませました。家に帰っても小さなラベルに数字(分類番号)を書いてくる、分類に合わせた絵を描いてくる等々。

短時間ですが関わることにより〈良くしていこう・きれいに使おう〉という気持ちが膨らみました。そして、子どもたちにも出来るだけ関わって、愛着をもって図書室を利用してほしいと思いました。」

Aさんは9時からのお仕事を持っている

方です。そこで、人より早く来校しているいろな下準備を手伝ってくれました。

Aさんはとても絵が上手いのです。



その特技を活かして、左の図のように絵を描いてもらい表記しました。

この試みは大当たり。とても素晴らしいサインになり、絵を見ただけで、その書架にはどんな内容

の本が並んでいるか1年生から6年生まで一目瞭然でわかるようになりました。

この「絵での表記」は図書室を明るく、楽しいものにしてくれました。例えば、「伝記」だけでは言葉の意味がわからなくても、絵があることから想像できます。

また、Aさんのお子さんYさんとお友達のAさんも一緒に手伝ってくれ、「こんな本があったの！読んでいなかった！」と埋もれていた本を見つけて残念がっていました。その二人はこの年に新中学生になりました。

さて、次に図書整理に始めて参加してくれたIさんの感想をご紹介します。

「春休み前から始まり、約2週間はかかったでしょうか。

まずは、本を拭いて、それから本の種類ごとに分ける(本を分類する)。そして、その本1冊1冊に小さなシールを、そのシールに文字や数字を書きました。細かい仕事で不器用な私にはちょっと大変でした。でも、やっていく間にコツをつかんで、だん

だん楽しくなりました。

本の種類もたくさんありましたが、分かりやすく細かく分けて、絵本は画家さん別に、読み物の本は作家さん別にしました。シールも細かく色別にして工夫したりしました。子どもたちが自分で借りた本を返すので、これならわかりやすいなと確信しました。

私はいつも本を読み聞かせするだけで、今回の作業には戸惑うことばかりでした。読み聞かせのお母さんたちはスゴイですよ。本の題名を言うと、すぐ作家さんや画家さんの名前が出てきて内容までが！本当にスゴイです。」

私たちの作業はただ書架に本を並べるだけの作業ではありませんでした。埃だらけの本をまず乾いた布巾で丁寧に拭いてから、細かく分類をして、それに番号を表記しました。もちろん、始めから分類番号はついていましたが、それは大雑把なものでした。

例えば、「歴史200」という具合です。つまり、日本の歴史、世界の歴史、伝記、地理がみな「200」の番号でした。ですから、子どもたちが本を返却するときに、「200」の番号はその書架ならどこにでも返して良いわけで、結果的に本はグチャグチャに置かれるのは当然のことでした。

Iさんは毎朝9時から時には午後からも時間のあるときは足繁く通ってくれました。

始めは「本を拭いて並べるだけ」という軽い気持ちでの参加でしたが「子どもたちが図書室を使いやすいように」という思いに変わり楽しんでくれました。

また、公共図書館を利用したことがないので、本に分類番号があることを知りませんでした。公共図書館では細かいデータで整理されていますから、知りたい情報を素早く手に入れることができるというシステムを少し理解してもらえたかと思います。

また、本を保護するフィルムを無駄なく切りそろえ、段取り良く作業を割り振りしてくれました。さすが、主婦の力はここでしっかり証明されました。

次にいつも当別こども図書館を利用してくださっているKさんの感想です。

「・・・中略・・・目的はあくまでも子どもたちにとって、より使いやすい、楽しめる図書室作りだろうとおぼろげに感じました。そして、見えないトンネルを突き進んだ後に、あんなに整った図書室が待っていてくれたのは感動！です。

卒業した子どもたちも手伝ってくれたことも嬉しいことの一つでした。今、学校にいる子どもたちにもそんな気持ちが伝わって、本を好きになってほしいな、とも感じました。みんな、本を大切にね。時々整頓に行くからね。そんな母たちの気持ちも少し伝わってくれたら嬉しいです」

ご自分の子どもたちといつも沢山の本を楽しんでくれるKさんにも得意分野がありました。字がきれいで、読みやすいことです。絵本と読み物には画家と作家の頭文字を丸いシールに書くことにしていました。それを次にご紹介するNさんと一緒に宿題にして家で書いてきてもらいました。これは、翌日、図書室での仕事をスムーズにすすめるためです。

そして、もっとも力になったのは、分類作業の一助になったことでした。やはり、沢山の本を読んでいる力は分類の仕事には一番大切な経験だと確信しました。

4月に新中学生になったMさんが一緒に作業をしてくれたのも楽しい思い出になってくれたと思います。

男の子を3人も持つNさん。Nさんのお子さんたち（MさんやYさんと同級生）の

K君と4月に小学校新一年生になるY君も図書整理に参加してくれました。

「図書整理で分類すると、今まで全く目に留まらなかった本たちが、それぞれの居場所で生き生きとしはじめ、こんなに多くの蔵書があったのかと驚いた。そして、分類によってはとても冊数が少なかったり、古いものしかなかったりなど、それぞれの分野の生い立ちを見たような気がした。

それでもどの本もまた、子どもたちの手に取ってもらう役割がある。そのために返しやすく整理しやすくする工夫をした。・・・中略・・・手伝ってくれた息子たちは（見やすくなった図書室から本を借りたい）（1週間経ったら、どこの棚から借りたか忘れるけど、きっと今度は返せるね）だった。図書室のお世話で愛着がわいたようで、息子たちの図書室びいきにびっくりした。」

Nさんが指摘するように今回の作業でわかったことは「産業600」の資料が30冊もなかったことでした。当別町の基幹産業である「農業」の資料が少ないのです。また、北海道の酪農・水産業・林業の資料もまばらでした。一方、歴史・伝記ものは「まんが」が主流で、読み物としての本とのバランスが欠けていたことも残念な発見でした。

今回、総勢10人近いお母さんたちに手伝ってもらいました。こうして、多くのお母さんたちに関わってもらい、少しでも小学校の図書室の様子をわかってもらったことは良かったと思っています。もちろん、私一人の力ではこれだけのことはできませんでした。

小学校の図書室はどんなふう工夫すれば、本と子どもたちが出会えるのか、この1点が最も大事なことだと考えます。

そのために小学校の図書室に専任の司書が居てほしいものです。しかし、町では「財政難で無理」の一言で片づけられることも現実です。一方、クラスを持っている司書教諭の先生には時間的に無理があります。そこで、子育てをしている親に図書室の現状を知ってもらうのが一つの戦力になると考えました。

P T Aの活動を通して保護者にもっと図書室に関心をもってもらうことが学校図書館をより良くすることではないかと考えます。

次年度からP T A活動の研修で「図書整理」の部門を設けてくれるように依頼しました。保護者の関心があれば、学校側も図書室の事に関して疎かにできなくなるだろうと考えたからです。

本当は司書の仕事はこんな整理ばかりではありませんが、これが第一歩だろうと思います。

「図書館運動は一人で頑張らない、一人から二人に、そして三人に広めなさい」という菅原峻先生の言葉を思い出します。確かに図書館は一人では始められないけれど、始まりは一人からです。

図書館に関心を持つ仲間を増やし、図書館を知ろうとする仲間と学び、図書館をほしいと願う仲間が集まったら、いつか「図書館」がはじめられるだろうと思います。

「図書館をはじめる」という菅原峻先生の言葉はいつしか当別町に図書館がほしい私たち一人ひとりの住民の合言葉に広がっていくことを願いつつ、私の「としょかん村10号」をおしまいにしたいと思います。

菅原峻先生のご冥福をお祈りします。

(ほりえ・みちよ／としょかん村同人
当別ライブラリーファン)

てんぐ図書館シリーズ その4 『歌え！ ミノムシ』

(なまけんぼメルさんのはなし)

草谷桂子

まだらに色付き始めた山が重なっている。ミノリはランドセルをゆらしながら、息せききって三つめの登り坂をまがった。ここまででは、ケンも追いかけてこないだろう。「ミ、ミ、ミノムシ どもり虫 は・は・はさんで すてちまえ」

ケンはミノリをみると、意地悪な目ですぐそういう。それもミノリの口調をわざとまねて、どもっていう。きょうはトカゲをつまんで校門で待っていた。

ミノリは全速力で逃げた。足には自信がある。なんたって、片道40分の坂道を登ったり降りたりして学校に通い続けているのだもの。それも、もう4年間も。

後をふりかえると、でこぼこの白い道が途中でコトンと消えていた。つづら折りの坂道は、いきなり今までの景色がみえなくなる。

ひと安心して前を向いたら、メエさんがいた。切り株に腰かけて編み物をしている。銀色の長い髪を後で結び、ふちなしメガネのなかにはやさしいたれ目。まるで絵本の中から抜け出たヤギのおじいさんのようだ。

ミノリは、メエさんを見ると、ほんと安心して。メエさんは村人からは「なまけんぼ」とかげ口を言われている。いつも、のん気そうに野山を散歩しているからだ。

でも、ミノリにとっては守り神だ。だれかにいじわるされそうな時に、なぜか、ふわっと目の前にいる。

きのうは図書館で会った。メエさんは、にげこんだ新聞コーナーで英字の新聞を読

んでいた。追いかけてきたケンは、間が悪そうにまわれ右した。ケンは、なぜかメエさんが苦手らしい。

メエさんの本名はメル・マンリグイス。てんぐ村に住むただ一人の外国人だ。パートナーの美月さんと、小さな手作り小物の店「つむぎ堂」を経営している。若いころの美月さんがカナダの山を登山したときのガイドさんだそうだ。

この村ではだれも「メルさん」と言わないで「メエさん」という。「メル」が「メエ」に似ていることもあるが、顔がヤギそっくりなのだ。でも、ほんとはまだ40歳ちょっと前で、赤ちゃんのパパだ。

メエさんの仕事は、美月さんが草木染めた毛糸で編み物をする。いつも野山を散歩の途中、切株や石に腰かけて編み物をしている。

だまって近づくと、メエさんはメガネ越しにミノリを見て、ほっこりわらった。

「お～。おかえりですか、ミノリさん」

メエさんは、しぶ茶色の編み物を竹のかごに入れると、切り株の場所をあけて、ミノリをすわらせてくれた。

メエさんはいつも不思議なおいだ。新しい畳のおいだったり、しぶ柿のおいだったり、かれ草のおいだったりする。

きょうの香りは、ラベンダー入りの蚊取り線香のにおい。メエさんのにおいに包まれているだけでミノリはほっとする。緊張がほどけていく。

メエさんは何も聞かない。でも、きつと

知っている。ミノリがどもるので、いつもケンにいじめられていることを・・・。

メエさんはハミングしながら編みものをしていた。じっと眼をこらしてみていると、目が回りそうに早い。二本のかぎ棒がリズムよくクロスしていく。まるで早送りしている動画みたいだ。メエさんは、

「何を編んでいるか、わかりますか？」

とミノリのほうを見た。それでも、手はしっかり動かしている。

「・・・わ、わからない・・・」

「たしかに、これだけでは、わからないでしょう。ヒント・・・冬に使うもの」

「う～～。マ・・・マフラー？」

「いいえ。もっと小さいです」

「て・・・てぶくろ？」

「ピンポーン。あたり～～」

「では、この色は何でそめたのでしょうか」

「ド・・・ドングリ？」

ミノリは去年の秋、メエさんがドングリを拾っているときに会った。そのとき、

「ドングリで染めると、渋いお茶色になるのです」

と、言ったのを覚えている。

「お～～。ざんねん！」

メエさんは、両手をあげて首をかしげた。「ドングリと同じような色だけど、これは、桜の葉に灰をいれたのですよ」

「そ、そうなんだ。不思議な色になるんだ」

「そう、大変身ですね」

メエさんは、またハミングしながら編み続ける。眼の前を、天使が通り過ぎてもおかしくないような、静かな静かな時間。

時々聞こえる小鳥の声。風で木の葉がこすれる音。地面の下の方で、チチチチと何かの虫が鳴いている。

ミノリはこんな時間が好き。そして思う。(メエさんは、山や野原の音や、においもいっしょに編みこんでいるんだよ。きっと)

「おや、もう4時近いですね。木の枝の影で分かります。そろそろ帰りましょうかね」

メエさんは、ミノリの手をとってたちあがった。まるで映画のなかの紳士みたいに。そして、いたずらを思いついた男の子のようにミノリを見つめて、にっこり笑い、

「そうそう、こんどうちに 遊びにいらっしやい。日曜日の午後1時！ オッケー？」

メエさんは、パチッと指を鳴らした。

「オ、オッケー」

不思議だ。ミノリは指の音に誘い込まれるようにうなずいていた。

メエさんは、きた方向にむかって歩き始めた。メエさんの家は、学校と駅を通り過ぎた林の中にある。

ミノリも最後の坂をのぼりはじめた。ふりかえると、メエさんは相変わらずゆったりゆったり歩いていた。

日曜日の御昼過ぎ。メルさんとの約束の時間まであと一時間だ。ほんとは、ちょっと気が重い。

お母さんとお父さんは、トラックに乗って山の畑にシイタケのほだ木の片付けに行った。中学生のお兄ちゃんは部活でいない。

ふと庭に目をうつすと、おばあちゃんが背中を丸めて、たらいに入れたクルミを洗っていた。

(クルミ・・・メルさんは染料に使うって言ってたっけ。おばあちゃんは何に使うんだろ)

そう思ったとたん、腰を伸ばしたおばあちゃんと目があつた。

「ミノリ、暇か？」

おばあちゃんはいつも、遠慮がちにいう。だから大抵のことは手伝う。

「い、いいよ。なに？」

頼みごとの中身を聞かないうちに返事するのも、いつものことだ。

「このクルミ、メエさんとここに届けてくれ

んかね」

「え～。ど、どうして？」

ミノリが珍しく眼をむいたので、おばあちゃんも驚いた顔をした。

「この前ね。頼まれたんだよ。染物に使うんだってさ。ミノリに持って来てほしいみたいだったよ」

「そ、そういうことか」

それでは行かないわけにはいかない。決心のついたミノリは、クルミの入ったビニール袋を荷かごに入れ自転車に飛び乗った。

十分後、林の中のメエさんのお店に自転車を乗り入れた。「つむぎ堂」は、ドライフラワーと染物のにおいが満ちていた。

お店の隅のカウンターに細い美月さんがラベンダーの花みたいに座っていた。

「いらっしゃ～い」

美月さんは、ほほえみながら裏庭を指差した。ミノリは、生かわきのドライフラワーや染物を干した棚をくぐり抜けた。

そのとたん、ミノリは心臓が飛び出そうに驚いた。だって、そこに困り顔のケンがいるんだもの。

回れ右して逃げ出そうとしたら、赤ちゃんをおんぶしたメエさんが立ちはだかった。

「ようこそ、ミノリちゃん」

メエさんは両手をあげて、大歓迎のゼスチャーをした。

「きょうは、ツリーハウスのお披露の日なのですよ。初めて使ってもらうお客さんは、どうしてもミノリちゃんとケンさんでなくっちゃと決めたのです。それに、このトクちゃんもです」

メルさんは、背中の子を大きくゆすりあげた。トクちゃんは、背中で、足をばたばたさせて、キャッキョッと、のけぞって喜んだ。

それを見たケンがフエッとへんな声を出したので、トクちゃんは、またまたキャキ

ョッと笑った。ミノリもなんだか、笑いそうになった。

「まずは、ここにおかけください」

メエさんは藤棚の下の木のテーブルに案内してくれた。これもメエさんの手づくりらしい。不ぞろいの椅子が五つ、テーブルの周りに置いてある。

「歓迎のウエルカムドリンクを持ってきましょう」

メエさんが引っ込んだらすぐに、ケンが真剣な顔でミノリに聞いてきた。

「お、おまえもあれか？ ほら、メ、メエさん、指をパチッて鳴らすだろ。あれやられると、どうも言いなりになるんだ」

ミノリはおかしかった。だって、ケンは意地悪することすっかり忘れているんだもの。それに、なんだかどもっているみたい！

「そ、そう。た、たしかに、わたしもそうだった」

ミノリがいうと、ケンは安心したように、「や、やっぱなあ。あいつ魔法使いじゃねえ？ き、気をつけたほうがいいぞ」と、怖そうに眉をひそめた。

とりあえず、今日はケンはミノリに意地悪する気はなさそうだ。それに、メエさんがいる。ミノリは気持ちが楽になった。

メエの入れてくれたお茶はレモングラスとミントのハーブ茶だった。それに、あんずの入ったクッキー。

美月さんもメエさんの背中からトクちゃんをだっこして加わった。ケンが口に入れたクッキーをトクちゃんがよだれのついた手でとりにいったので、みんなではじけるように大笑いした。

トクちゃんが、

「なにをみんなわらっているの？」

と聞いたそうなきょとん顔をしたので、またまた大笑いした。トクちゃんのおかげで、ミノリの緊張はすっかりとけてしまった。

ケンも同じらしい。調子に乗って、「アバババー・・・ビー」などとあやしては笑わせている。トクちゃんは足をバタバタさせて、よだれをたらして笑った。

「トクちゃんは、ケンちゃんが気に入ったみたいですねえ。おんぶしてみますか？」

メエさんにいわれて、ますます調子づいたケンはおんぶした。

それから、「オットット。オットット」といいながら、ひょうきんにリズムをとって庭を歩き回った。トクちゃんは、ずっとはねて喜んでいた。

その間に、メエさんがツリーハウスお披露目の準備をした。庭の大きなブナの枝の分かれ目に、犬小屋を倍にしたくらいの大さきの家が乗っている。その横に広がった太い枝に、大きなずた袋をくくりつけたブランコが二つぶら下がっている。

メエさんはそのずた袋に、庭に咲いている花をしばりつけている。

「見てください。この袋、松の苔で染めて、私が編んだんですよ」

ふたりは近くまでいって袋を見た。

「ほんとだ！」

ミノリはさげんだ。びっくりした。太めの麻の糸で、ざくざくと器用に編んである。しかも、カンガルーみたいにポケットまでついている。

「すげえ」

ケンも目を白黒させた。ふたつのずた袋に色とりどりの花が飾られた。

「それでは、いよいよブランコ付きツリーハウスのお披露目式ですよ。美月さん」

メエさんは美月さんと呼んだ。

「今日は、美月さんの誕生日です。このツリーハウスがわたしからのプレゼント」

メエさんは満面の笑顔の美月さんの髪にも、赤い花をさしてあげた。それから、美月さんの手を取って、

「ハッピー バースディ ツーユー」と歌いながら、はしごをかけたツリーハウスに上らせた。

窓から美月さんが顔を出した。ほっぺがほんのりピンク色でピースサインをした顔がとても幸せそうだった。

「次は、あなた方の番ですよ」

メエさんは、トクちゃんをケンの背中から外した。

「お、おめ先に行けよ」

とケンが云うので、ミノリはそろそろとはしごをのぼった。ハウスに足をかけ中に入ると、思ったより広い。ここで本を読んだらサイコウだ。窓から顔をだしたら、いろんな香りのまじった気持ちのいい風がほほをなせていく。

下でメルさんたちが手をふっている。ふたりで思いきり手をふった。

ハウスから降りたら今度はいよいよブランコだ。

ミノリは赤い花の多いずた袋に入った。ぬくぬくとあたたかい。底に固い板が置いてあって座り心地もいい。ケンももうひとつのブランコにおさまった。

「いいですかあ」

美月さんは、ケンとミノリのブランコをかわるがわるに押してくれた。

ケンのブランコとミノリのブランコは空中で交差した。ケンは嬉しくてたまらない顔で、「いち、にい、さん・・・のしい」と叫んでいる。

ブランコは次第に勢いがついて、木々の緑が近づいては遠ざかった。いつのまにかトクちゃんを抱いたメルさんが、ハウスの窓からのぞいている。ブランコから飾っていた花が少しずつ舞い落ちた。

その時、ミノリははっとした。茶色のずた袋からのぞいているケンは、青い空を背景にして、ちょこんと首だけ出している。

まるでミノムシみたいだ！そう思って、ふとメエさんを見ると、メエさんは待っていたみたいに指をパチッと鳴らした。

ミノリの口からいきなり歌が飛び出した。「ミ、ミ、ミノムシ　どもり虫　は・は・はさんで　すてちまえ」

あの時のケンの顔は、一生忘れられないだろう。口をポカンとあけて、これ以上ないような間抜けな顔でミノリを見ていた。

それから、やけくそのように後に続いた。「ミ、ミ、ミノムシ　どもり虫　は・は・はさんで　すてちまえ」

二人は、何度も声を張り上げて歌った。うた声は、ブランコといっしょに交差して、びかびかの空に吸い込まれていった。おしまいの方は、ふざけた笑い声になった。

ミノリは、自分の悪口を歌っているのに、なぜか気分が爽快だった。

(もう何を言われたって平気) そんな気がした。背中にずっと張り付いていたものがストンと落ちたみたいだった。

今度はメエさんと美月さんトクちゃんがブランコに乗り、ケンとミノリはツリーハウスに上った。いい香りを運んだ風がとおりにぬけていった。下を見ると、メエさんとトクちゃんを抱いた美月さんが、ゆうらりゆうらりブランコにゆれていた。

そのうち、トクちゃんがぐずったので、美月さんはトクちゃんを抱いて子守唄を歌った。トクちゃんは、すぐにコトンと眠ってしまい、ハンモックの上に移されて、安らかな寝息を立てている。

メエさんは、「ゆっくり遊んでいっていいですよ。これ自由に使ってください」といって、がらくた箱をだしてくれた。中には木切れの端っこや、クルミの皮など、あまりものが仕切って入れてある。染めた毛糸や布の半端も

のもたくさんあった。

(なんか作れそう・・)

ミノリが毛糸をながめていたら、いきなりケンがさげんだ。

「いいこと考えた。ミ、ミノリちゃん。この毛糸切ってミノムシの家を作ろうよ」

「え？」

初めてケンに「ミノリちゃん」と言われた。思わず聞き返す。

「あのさあ。毛糸小さく切った中に巣から出して裸にしたミノムシ入れとくと、毛糸で自分の家作るんだよ」

ケンは目を輝かせた。

「前にさ、色紙と毛糸を切って入れといたら、すげえきれいな家作ったんだぜ。おれの姉ちゃん、それでペンダント作ったもん」

ケンは得意げに鼻をびくびくさせた。

「い、いいねえ。そうだ！　それで何か作って図書館フェスティバルのバザーに出さない？」

ミノリもうなずく。

「お、おれ、ミノムシたくさんいる木、知ってるぜ。学校の裏の池のどこ」

ケンは学校に向って今にも走り出しそうだ。

「ちょ、ちょっと待って。こ、この毛糸、もらえるか聞いてこようよ」

ふたりはメエさんのいる事務室に行ってみた。メエさんはパソコンをしていた。画面をのぞくと、メエさんの作った編み物の作品がきれいに並んでいる。

「つむぎ堂ね。こうして作品をネットで紹介して販売してるんですよ。カナダや外国のお客様から注文たくさんきます」

「すご〜〜い」

ケンとミノリは同時に言った。

メルは、ゆっくり画面をずらし、商品を見せてくれた。しっとりした色合いのセーターやマフラーや手袋、木の実のペンダン

トの商品には、素敵な名前がつけられている。「芽吹き」「春の音」「ひなたぼっこ」「残照」「夕焼け小焼け」「ぬくもり」「散歩の友」「風の歌」「せせらぎ」など。その下に英語の説明もある。

「メエさんって、詩人だね」

ミノリはため息まじりに言った。

「メエさんって、『なまけんぼ』じゃないよね」

ケンは、遠慮なくいって、あわてて口を押さえた。メエさんは笑っていた。

ミノムシのことを話すと、メエさんは、「ミノムシ変身大作戦ですね」

とおもしろがり、糸くずを入れる菓子箱と、真紅と黄緑の毛糸を足してくれた。

はさみを借りて、たくさんの色の毛糸を小さく切った。出来上がったら、どんな色合いの巣になるのだろう。ペンダントやブローチにして、図書館フェスティバルのバザーに出したら、みんなおどろくだろうな。ミノリは楽しみで仕方ない。

ミノリは、メエさんにもらったクルミの代金と一緒に、毛糸入りの箱をバッグに入れて自転車に乗った。

ケンとあすミノムシをとる約束をした。

「フェ、フェスティバルまで秘密だぞ」

別れ際に、ケンはおっかない顔で念を押した。けれど、ミノリは平気だった。

「ケンもだよ」

ミノリはそういってから心の中でウフフと笑った。

(ケンが時々もることも秘密にしてあげるね)

山は、そろそろ暮れてきた。

「ミノムシ、変身大作戦よ」

ミノリはつづら折りの山に向かってつぶやいた。それから、

「ミ、ミ、ミノムシ どもり虫 は・は・はさんで すてちまえ」

と自転車のリズムに合わせて、大きな声で繰り返し歌いながら家に向った。

(おわり)

～菅原峻先生 お導き有難うございました～

先生にはわたしの図書館活動30年の間、折に触れ、沢山の教えをいただきました。「としょかん村」同人にお声かけをいただいた時は、丁度会の代表を降りた時。我が市の指定管理者制度導入が凍結された時でした。引退した身には神の啓示のように聞こえました。「私にはまだ〈書く〉と言う役割がある」と。

しかし、同人の発行回数は予想していたよりも多く、我が市の図書館問題も楽観できない状況が続いていました。しばらく休筆をお願いしたら、先生から「頑張ってください。凱旋を待っています」とお返事が

ありました。戦況を伝える度に励まされ、何となくいい状況が期待できることもご報告できました。

去年の12月22日、市長の臨時記者会見で「静岡市の図書館は直営を堅持します」と力強い宣言がありました。6年間の闘いが決着した瞬間でした。

「菅原先生！ようやく凱旋できましたよ！今度こそ書きます！」

天国の菅原先生、あのふっくら笑顔で喜んで下さっている事でしょう。たくさんのお導きありがとうございました。

どうぞ、安らかにお眠り下さい。 合掌

(くさがや・けいこ／としょかん村同人／静岡図書館友の会)

原発、そして図書館

小松晴子

はじめに

2011年3月11日、東日本大震災、それに続く福島第一原子力発電所の事故。そして6月、菅原峻先生が逝かれた。

菅原先生は、図書館を支える市民運動が必要だ、それも、ほかのことをしながらではなく、図書館のことを専門にする人が必要だとおっしゃった。また、この同人誌「としょかん村」も誌名のとおりテーマはあくまで図書館であり、それ以外に拡散することは望まれなかったようだ（「としょかん」120号）。

私は図書館一筋の人間ではない。勤めていた出版社の倒産を機に図書館短期大学の別科で図書館学を学び、いったんは図書館畑に踏み出したが、職業として貫徹することはできなかった。

それから、子どもの本に関わる活動や図書館作り運動だけでなく、ごみ問題（隣町の能勢町で発生したダイオキシン汚染問題から）をはじめ、様々なことに関わってきた。そういう意味では私は菅原先生の考えには背く者である。

しかしながら、先生ご自身は、世の中の理不尽への怒りを心のうちに人一倍強く持っておられる方だと私は感じていた。先生の内には、小さき者弱い者への温かいまなざしがあり、虐げるものへの反骨があった。図書館作りの先導者としての旅ではそのことを封印しておられたように思われるが、おそらく多くの人がそれを感じ取っていたのではないだろうか。

だからこそ、民主主義の礎としての図書館を語る言葉に、あんなにも人を感動させる力があったのだと思う。

実際には、図書館運動をする人には、図書館以外の様々な市民活動にも携わっている人が多いと思う。私自身、今「としょかん村」の終刊にあたって、何かを書こうと思えば、どうしても原子力発電所のことを思わずにはいられない。とりわけ、各地で反対運動をしてきた人たちのことを。図書館運動も長くて大変な道だし、どんなに頑張っても成果が目に見えないことも多い。でも、なんといっても、何かを作っていくという点では前向きな運動であり、喜びがある。

一方で反原発運動は本当に困難な運動だ。チェルノブイリ事故の前後反原発運動の末端に連なりながら、離れてしまったことを今悔いている。その思いは私だけではないようだ。福島の人々に思いをはせながらここで図書館のことと並べて反原発運動のことを書いても、きっと先生はお叱りにならないと思う。

反原発の原点

私は娘のアトピーをきっかけに食品添加物や農薬、環境汚染の問題に関心を持った。「使い捨て時代を考える会」や「枚方・食品公害と健康を考える会」など無農薬野菜の共同購入会に入って勉強するうち原子力発電所の問題が現在の日本で最も深刻かつ根源的な問題であることを学んだ。少し後

に『アレルギーの窓から大地が見える』という題の本が出たが、まさにそれが実感だった。

それから間もなくチェルノブイリ原発事故が起こり、8000キロ離れた日本でも牛乳やお茶が汚染された。88年には愛媛県の伊方原子力発電所の出力調整実験に対する大規模な反対運動がおこった。東京での2万人集会にも参加した。これなら本当に原発は止められるのでは、と思えるほどの熱気と高揚感だった。（もちろんそんな甘いものではなかった。）

関西では、福井県に現在13基の原発があるが、太平洋側にも計画があった。和歌山県日高町がそのひとつである。当時日高町の比井崎漁協は原発推進理事により借金が膨らんで経営破綻の瀬戸際にあり、漁業権を関西電力に売り渡すかどうかで組合員が賛成派と反対派の真っ二つに割れていた。

漁協を再建するための預金運動を知ってわずかばかりの預金をしたのがきっかけで、私は日高町に通うようになった。漁協総会は紛糾の末何度も流会になったという。そして88年、警察や消防に嚴重に警備された緊迫の漁協総会で、反対派が勝利し、関西電力による原発のための海上調査を拒否した。

（その後原発計画はなくなったが、隣の御坊市に使用済み核燃料中間貯蔵施設の計画があるという。まだまだ気が抜けない状況だ。）

今もそうだが、強大な権力を背景にした原発計画に反対するのは並大抵ではなかった。20年以上にわたる反対運動で、友人や親戚との関係もずたずたになった。それでも信念を曲げなかった日高町の漁師さんや町の人たちにどんなに感謝しても足りない気持ちだ。

そうした反対運動は日高町だけではなく。和歌山県日置川町や三重県芦浜も、同じように原発計画を押し返し、そのおかげで、南海・東南海地震の危機の迫る紀伊半島には、今、原発が一つもない。

同じように、全国のどの原発にも、どの予定地にも、その周辺には反原発に生涯をささげてきた方が大勢いる。とりわけ福島原発に反対してきた方々の無念は想像するに余りある。

社会教育のまち、枚方

こうした運動にかかわったのには、もう一つ、「社会教育のまち」として有名な枚方市に4年間住んだことも大きかった。

枚方市では、図書館以上に公民館が市民の生活に入り込んでいた。1階が楠葉（くずは）図書館、2、3階が楠葉公民館というつくりの建物。そこに行くのに、若い母親仲間が、「図書館に行く」と言わずに「公民館に行く」というのはなぜだろうと最初は思っていた。が、間もなく私も頻繁に公民館に出入りする市民の仲間入りをした。

枚方市ではまさに市民が主人公として見事に公民館を使いこなしていた。（図書館はその下支えをしていたという感じだろうか。）

ここで、本当にいろいろなことを学んだ。人形劇をはじめとするさまざまな催しを親子で楽しんだし、保育の自主グループも作った。また、大人対象の催しもほとんどすべて保育付きだったので、心置きなく参加することができた。公民館主催のものもあったし、市民グループが主催するものもあった。

「不知火海」「水俣の甘夏」「わが街わが青春——石川さゆり水俣絶唱」「越後奥三面——山に生かされた日々」「草取り草紙」などのドキュメンタリー映画、砂田明さんの一人芝居、クラムボンの会やこんにゃく座の公演、当時まだ知られていなかったサムルノリ等々。

幼い子どもの心はスポンジのように何もかも吸収するが、子育て中の親もまた、子

どもに導かれるようにして、それまで見えなかった世界が見えるようになるものなのだろう。

そんな中で、映画「シルクウッド」や「24000年の方舟」を見、広瀬隆さんの講演を聞いたのである。スタッフを入れても聴衆5、6名というささやかな集まりだった。公民館で普通にこういうことができる時代だったともいえる。

猪名川町で

やがて私たちの家族は兵庫県猪名川町（いながわちょう）に引っ越すことになった。新住民が圧倒的に多くて市民パワー全開といった雰囲気の方とはちがって、猪名川町はまだ農山村の気風が残り、新住民はよそ者だった。市民グループといえるものはほとんどなく、役場の空気も閉鎖的だった。

しかし新旧住民の中にも、バブル景気にのった乱開発、とりわけゴルフ場開発などによる自然破壊や水汚染に危機感をつらせている人々も少なくなかった。

私はそうして出会った何人かと一緒に猪名川町の歴史を学ぶ勉強会を始めた。小さいサークルで、地元で様々な活動をされていた女性を講師役にして勉強したのだが、それは、原発のことや環境のことを話せる仲間づくりでもあった。また公民館サークルとして活動する中で、枚方のように自由で市民主体の公民館にかえていきたいという思いもあった。

まだ猪名川町には図書館がなかった。このサークルで、町をよくしていくにはどうしても図書館が必要だということを訴えた。

当時この会のメンバーの心配事の一つは、猪名川町はじめ近隣市町の水がめである一庫（ひとくら）ダムのダム湖をリゾート地として開発するという計画だった。しかし環境を守る運動はどうしても「反対運動」になる。バブルに沸き、日本中がそちらに

向かって走っていた当時は、そうならざるを得なかった。一方図書館作り運動は役場との協働作業となる。同じ人が両方やることはできないので、それぞれの関心に従って「役割分担」することになった。

菅原先生との出会い

そうして図書館について話し始めたころ、町広報に「図書館建設住民説明会」のお知らせが載った。それまで主要な施策を決める委員会の委員は町の「有力者」に決まっており、一般の住民が意見を言える場はなかった。当時先行していた「文化体育館」の建設にあたって、親子観覧席を設けてほしいと言いに行った人たちは、「子どもを連れて行こうなんて。何のためにご近所があるんですか」と説教されて帰ってきたという。私たちは「どうせ、住民の声を聞いたという形だけ作るためのものよ」と、全く期待しないで説明会に出かけた。20人ばかりの住民が出席したその会で、お話ししてくださったのが菅原先生だった。

そのお話にみんな引き込まれた。本を読む人だけでなく、本を読まない人も来て、ここには私の居場所があると思える場所。本を借りるだけでなく音楽会や講演会やいろいろな活動ができる場所。そこにいた誰もが、そんな図書館ならぜひほしいと願ったと思う。

私は枚方の公民館のことを話して、公民館と図書館の関係について質問した。すると先生は、「今は図書館だ、公民館だという時代ではない。その全体を図書館と呼びましょう」とおっしゃった。たちまち頭の中に新しい図書館のイメージが立ち上がった。その場ですぐに紙を回して、「図書館のことを考える会を作りませんか」と呼びかけた。これが菅原先生との出会いであり、「いながわ図書館を考える会」の始まりであった。1991年8月のことである。

図書館ができるまで

スタートはよかったが、そのあとは問題続出だった。菅原先生が執筆された「基本計画」は「(仮称)文化創造センター基本計画への提案」(1992)と、後退し、事実上の棚上げとなった。設計者を決めるプロポーザルの結果は、町の大規模開発を担っていたゼネコンに(決まるべくして?)決まった。会報で懸命に訴え、設計見直しの請願までした。そうして出来上がった建物は、残念ながら、思い描いていたイメージには程遠く、いろいろな感情のもつれもあって、開館した図書館には、当初、愛憎半ば、というのが皆の正直な思いだった。すんなりと「友の会」への移行、というわけにはいかなかった。

「どんな図書館でも、できたものは町民の財産です。支えていくのはあなた方町民です」という菅原先生の言葉には「そう言われても・・・」と多少の反発を感じないでもなかったが、しかしそれには私たちが図書館の側に引き留める力があつた。

菅原先生の提案通りにならず苦さの残る図書館運動だった。だが始まりの時に先生が役場の人や住民に本当に大事なことを教えてくださったから、間違つた方向にはいかなかった。菅原先生が蒔いてくださった種は育って行つたのである。

1996年3月の開館から間もなく16年。いろいろの問題をはらみつつも、図書館は、また私たちも、間違いなく成熟したと思う。

道具としての図書館

今、私は日常でも仕事でも図書館のない生活は考えられない。

私の現在の感想を率直に言えば、図書館は目的ではなく道具である。

図書館が目的の運動だけでは、その広がりには限られてしまう。

かつて菅原先生がプロデュースされた

「図書館雑誌」の「Go!Go!図書館サポーターズ!」というリレー連載記事に、「あらゆる市民運動との連帯を」という題で書いたことがある(2000年7月号)。いろいろな市民活動をする人たちが、図書館が絶対必要だと感じてくれることが、図書館の存続にとってとても重要だという思いからである。そうでなければ、図書館は簡単に「仕分け」されてしまいかねない。

多くの人が道具として使うのに値する図書館でなければならない。そのためには、肝心なのはやはり司書である。図書館に限らず行政に参画するときいつも思うのだが、市民の運動には限界があり、行政の側でそれに呼応する人がいなければ何も変えられない。ある意味で隔靴搔痒なのである。

だから私は「としょかん村」に書くとき、だれよりも司書に読んでほしいと思っていた。図書館運動の中に、もっと司書の姿が見えてほしいと思う。

再び、原発、そして図書館

1990年以降、反原発運動は次第にしぼんでいった。原発推進勢力はあまりにも強大で現代社会に深く根を張っており、いつの間にか表立って原発反対とは言いにくい空気が醸成されていた。チェルノブイリの後、次は日本かという切迫した危機感があつたが、いつしか心のどこかで、そんなことはあるまいと高をくくる気持ちが大きくなっていったように思う。

今福島から発信されるブログのいくつかに触れると、本当に言葉もない。

私たちは図書館をもっと育て、道具として活用し、真実を知らねばならない。「図書館を利用して賢い市民になる」ことを今こそ実現しなければならない。

(こまつ・はるこ/としょかん村同人

猪名川町図書館協議会委員)

子どもの本の文学史から消えた本

「びはの左大将」

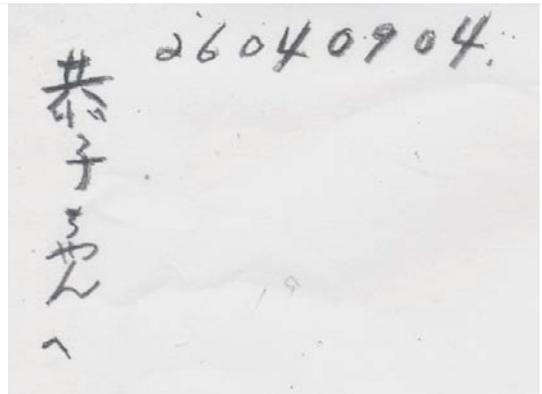
福山恭子

大阪国際児童文学館がオープンして、先生たちがゼミを開かれた。鳥越 信先生の『桃太郎ゼミ』を受講した。明治初期から現代まで、その時代、時代に桃太郎はどんな取り上げ方をされたか資料を集めて考察した。戦時中の本について話し合いをしたときに戦時中に読んだ「びはの左大将」について、鳥越先生がご存じか聞いてみた。「知らない聞いたことがないなあ」といわれ、そのままになっていたが、3年生頃に読んだ本が心のかたすみにひっかかっていた。昔の話だったと言うくらいしか覚えていなかったけれど。

7、8年前本箱の整理をしていたら、私の青春時代の大切な本へッセ全集の間から出てきた。紙が酸性化して、触れればぼろぼろになりそうな本を嬉しくて、そっと撫ぜた。「やっぱりあった **びはの左大将**」半分取れそうな表紙を開けると「26040904 恭子ちゃんへ」と書いてある。

昭和19年戦争末期に出版された本を当時海軍中尉だった叔父さんが誕生日のお祝いにくれたのだった。2604は皇紀の年号で904は私の誕生日である。

奥付を見ると、昭和19年発行で部数は、6000部とある。今、96歳の叔父さんに聞くと「その頃は配給制で、よく本を買っていたので新しい本がでると連絡をしてくれたから恭子ちゃんに買ったのを思い出したよ」と懐かしそうに話してくれた。クラシックのレコードを戦時中にそっと私達兄妹に聞かせてくれた素敵な叔父さんだった。



鳥越先生に子どもの読み物の文学史に付け加えて頂きたいという思いもあって、今にも崩れそうな本だったが、大阪国際児童文学館に寄贈した。原稿を書くにあたって文学館で資料として見せてもらった。大切にブッカーで補修され、ビニールの袋に保管されていた。もう私の本ではない。貸出禁止ですといわれた。

恭子ちゃんへと書かれた叔父さんの字がなつかしく、でも私の本ではないと思うとさびしかった。文学館で読みかえして、新しい本なんか手にはいらぬ時代に、夢中で読んだのだろうと幼い私の姿が思い浮かんできて、胸が一杯になった。

ふっと「インターネットで探してみよう」と思い付いた。静岡の古書店に1冊(500円)だけあった。紙は酸化していて色は茶色になっているけれどぼろぼろになっていないだけ、ましだった。(最近インターネットでしらべてみたら、3冊あることが解ったが、3000円以上の値が付いていた。私を買ったことが影響したのか?)

改めて読んでみると昭和19年の本だから、戦争を鼓舞するようなことが書かれていると思ったが、全くそうではなかった。昔の話だったかなという程度の記憶だったが、本を見た時表紙の絵は覚えていたような気がした。書名ははっきりおぼえていた。

著者と画家について

著者 ^{ほった まつさぶろう} 堀田 松三郎 ^{ほんちやうとうきこうしょう} 「本朝陶器攷證」の他に作品は「びはの左大将」だけで、子どもの本を書いた記録はない。

出身地も生年月日も死亡年月日も分からない。大阪国際児童文学館、茨木中央図書館で調べてもらったが、堀田松三郎に関しては、「びはの左大将」をかいたことと、本朝陶器攷證（昭和18年発行 幕末の陶器書校訂）をしたことしか、でてこない。

子どもの本の年表をみても「びはの左大将」は記載されていない。戦時中の子どものよみものについての評論も調べたが、全然書かれていないとのことだった。

画家 ^{きたむら あきみち} 北村 明道 日本画家 昭和2年8月帝展に初入選、以後帝展、文展、戦後は日展に入選する。人物画を能くした。

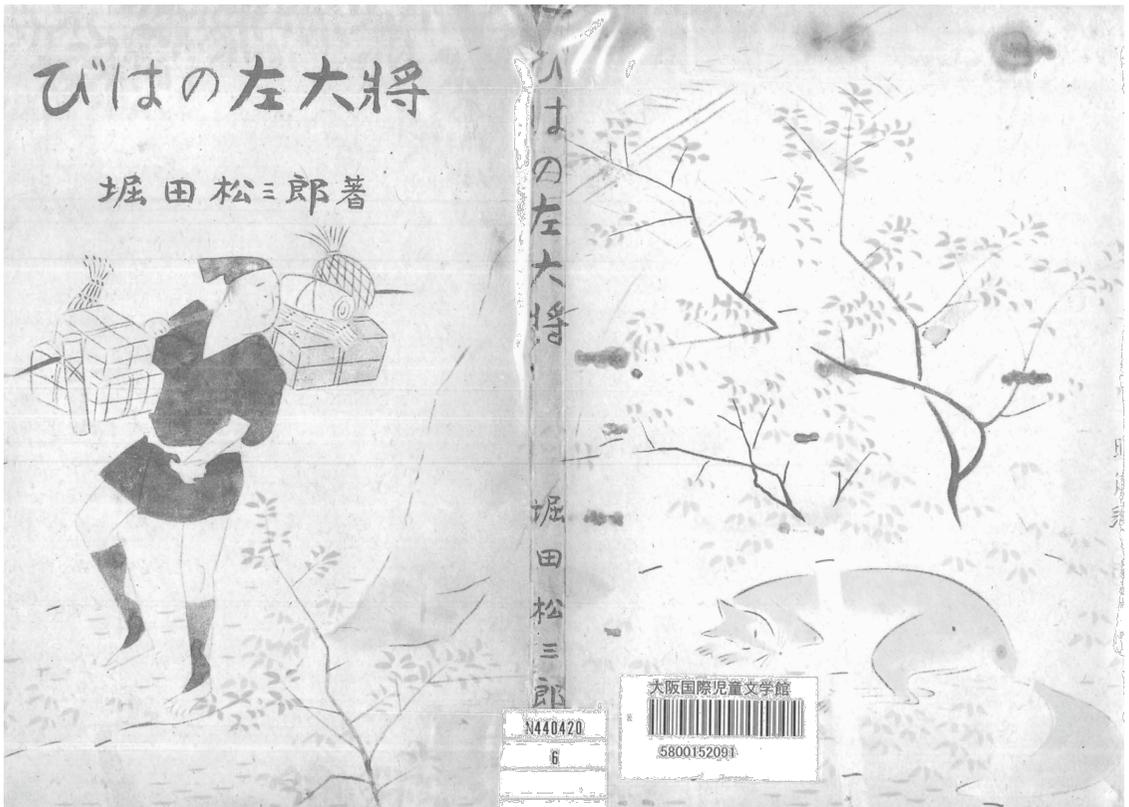
明治29年生～昭和37年没66歳

挿絵は大体一話に一枚かかっているが、墨をつかって筆で書かれ勢いのある絵である。一枚ごとに、落款がある。

日本画家の誇り？が感じられ、苦笑する。

昭和19年戦況が厳しくなってきた時代。なぜ、このような昔の話が6000部も出版されたのだろう。

『戦時中は、平和主義、厭戦、反戦的な物を出すことは何事だと紙の割り当てなど



で差別された。不要不急のものと言う形で、どんどん実質的にはやられていた。「少年飛行兵バンザイ」というようなところへ持っていきたいと言う国策だった。昔の話を書く懐古的な素材に持っていった場合にはそういう権力の目から一応のがれることができた』（子どもの本の百年史 鳥越信 他）

昭和16年10月 内務省の警保局図書課から『児童読物改善に関する指導要綱』がだされて、当時の国策に沿った内容の物をつくれと少国民文化協会が設立された。日本児童文化協会 山本有三、北原白秋などが、委員で昭和13年につくられた会が前身である。

昭和19年、20年は紙もない食料もないという状況の中で文学的な活動はストップされた。児童文化の統制を強化しようという時代に「びはの左大将」は出版された。

昔の話をやさしい文章で書いたということで、検閲から逃れたのだろうと推察する。

改めて「びはの左大将」を読むと作者の心使いが伝わってくる。思想的な事は書けないが、優しい心を子どもたちに伝えたい。優しい大人が子どもに語りかけ教え諭しているような気がした。「お国のため」とか、『りっぱな国民の一人になる』と言うことで、話が終わっている。国民、お国と書くのが、作者の精一杯の努力？だったのか。文の流れから言うと農民とか、お百姓と書くだろう。ただ、こうした時代に、天皇陛下のため、とか神風、戦争など昂揚の言葉はでてこない。作者の秘めたおもいが伝わってくるような気がした。

文章のまとめの部分を抜粋する。

（本文は旧かなづかい）

「きしいまぶり」

宗神天皇さまの御代でした。常陸に^{くず}国巢といふ悪者がはびこっていました。悪者退治の話であるが、やっつける様子が生き生きと書かれ面白い。

『では、常陸では、悪者の国巢が、みんなせいばつされてしまいましたので、まじめな国民は、大そう、よろこびました。そして、まへにもまして、せつせとしごとにせいを出し、ゆたかに、くらすことができるやうになつたと申します』



「かがみもちのまと」

『昔豊後に、豊かな、ものもちがありました。玖珠といふところにすまつておりました』あらすじは、玖珠の長者はわがままで働く事が大嫌いで机の前にただの一度もすわった事がなかった。沢山のみいりがあり

ながら、それを国のためや人のために、使わねばならぬという人としてのつとめの道を知らない。ある年のお正月、大勢の客の前で鏡餅を的に自慢の弓をひいた。鏡餅は真っ白な鳥になって空高く飛んで行った。いまに天罰を被るにちがいないと、長者の周りの人はみなさっていってしまう。（ここまでの話で人の善悪が優しくかかっている）

『さて、それからのちの、長者のみのうへについてはあまりくはしく知つてゐる人がありません。』『ばちあたりの長者のほかは、みんな、お国のお役にたつため、わき目もふらずに、はたらくのが、何よりも、すきだったからでした。』表紙の絵がその後の長者の屋敷跡『しの竹や、草などがぼうぼうと、おひしげつてゐました。そして竹やぶのすみで、きつねが子ぎつねに、ちちをのませてゐました。たび人は、見てきたまを、人に語りました。』を描いている。

「ひつりきとぬす人」

ぬす人を励ます場面のせりふ、『悪いと気がついたなら、これからは、決してぬすみなどしないのだ。まじめにはたらきさへすれば、だれでも、りつばな国民になれる。さ、いつまでも、ここにぐずぐずしてゐないで、急いで、家へかへるがよい。そして、これからは、一生けんめいに、はたらくのだ。』『ぬす人は、重いばつに落とされると、思つてゐましたのに、そのつみをゆるしてもらつた上、かうしてはげまされたので、すっかり、心を改めてしまひました。』

『そして、りつばな国民の一人になることが出来たのでした。』『ひつりきのしらべで、ぬす人の悪い心を改めさせた、博雅卿は、ただ、音楽のみちにすぐれてゐたばか



りでなく、こんな風に、心のひろい、しかも、正しいおこなひの人でした。それで、宮中でも、重く、もちみられました。』

「びはの左大将」

『あるときのことでした。陰陽寮の天文博士が、かう申しました。「これは大へんです。大将のくらゐのお星さまが、お月さまのかげになって、そのすがたがすっかりかくれてしまいました。これは、大将のおくらゐにあるお方が、わざはひのためになくられるきざしです。」そのころ、宮中で、大将のくらゐをたまわつてゐるお方といへば、びはの左大将と小野宮右大将のお二人でしたが、天文博士のうらなひをきくと、小野宮右大将は、大そうおどろいて、心ばいをいたしました。』

奈良の春日神社と、興福寺で小野宮右大将のために、わざわいを防ぐお祈りが大そ

うさかんにとりおこなわれる。この様子を見てきた人々は「おりっぱでしたよ。あんな神々しいお祈りはみたことがない。まるで極楽浄土をお参りをしているようだった」奈良の町中がその噂でわきかえっているようだった。

其の頃、奈良の東大寺の、お坊さま法蔵僧都は、びはの左大将の身の上が心配でかげながら心をいためていた。いく日たってもびはの左大将からはなにも言っていない。尋ねて行くと「なにか、急用でいらっしたのですか」落ち着きはらっている左大将をみて、お年を召されたので忘れっぽくなられたのか。法蔵僧都は小野宮右大将のお祈りの事を話すが、災い除けのお祈りはどうかかならないでくださいと断られる。断るわけは『びはの左大将はずかしくことばをついで、そのわけをせつめいしました。僧都には、ふしぎがられて、このわたくしを大ばかものだとお考へになられると思ひます。しかし、わたくしどもが、神さまや、ほとけさまにおまゐりしますのは、陛下のおんみいづがかがやき、この日本の国がさかえますように、おいのりをささげるためであります。ですから、わたくしのみがつてなおいのりをいたしましては、神さまや、ほとけさまをけがしたてまつることになりはしませんか。それに、小野宮右大将よりも年よりです。小野宮右大将は、これから二十年も三十年も、陛下におつかへできるお方ですが、わたくしは、このうえ長生きをしましても、何のお役にたつこともできないと思ひます。それで大将のくらのものが、わざはひをうけなければすまないのでしたなら 小野宮右大将がそのわざはひをのがれて、このわたしがそれをうけた方が、どれだけ世の中のためになるか知れません。』

小野宮右大将は『わたくしは何という心



のあさましいものであろうか。じぶんのわざはひさへ、ふせぐことが出来ればよいといふやうな、みがつてなふるまひをして、こんなはづかしいことはない。』

『二人とも、いつもこのやうに、まつすぐな心で、陛下のおんまつりごとを、おたすけ申しあげましたので、この廣いひろい国ぢゆうが、少しの波風もたたず、おだやかにをさまつたのであります。』紹介していたら、きりがないのでやめる。以上でこの本を書いた作者の気持ちがわかっていただけけるのではないかと思う。

私がおもうに「国民は日本の非常時にせつせとはたらくことがお国のためになる。」と言う事を強調することで、6000部の本を発行できたのだらう。

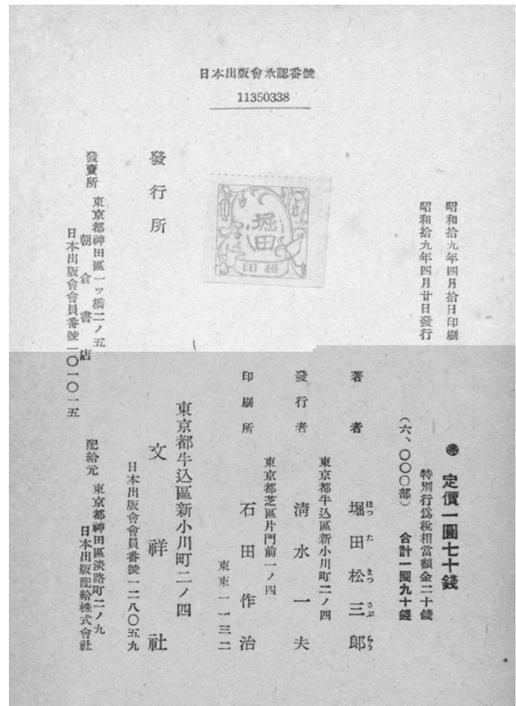
文学者の方からみると、検閲のきびしかったころ、こんな甘っちょろい作品を書いてというところだろうか。作者の堀田松三郎は挿絵を書いた北村明道のように子どもの本を書く作家ではなかったのではないか、この辺のいきさつを調べたいのだが手がか

りが全くない。やっとなつかめたのが、潮汐会というアララギ派の短歌会に関係していたらしいと言う事である。なんとか調べてみたい。

こどもの本の文学史、年表に記載されていないのは、不思議でしょうがない。戦時中の世相におもねった作品はその時代を現す作品として年表に出ているのに、だれの考えでできてしまったのだろうか。わたしの想像だが短歌に関係があったとして、歌人がこども向きの本を一冊書いただけということで、歴史からきえたのだろうか。

文章はわかりやすく、子どもに対して優しさに溢れた良い文章だとおもう。

経歴が分からないのも謎である。名前はできてても生年月日、死亡年月日もわからない。『本朝陶器攷證』にも経歴の記載はない。



菅原先生ありがとうございました。

4月ごろ日にちは覚えていないけれど、「としょかん村10号」の原稿のことで、菅原先生に電話をした。「戦時中にてた児童書で歴史からけされた本のことをかきたいのです。私にとっては忘れられない本でした。なかなか図書館に関連した事がかけなくて」というと先生は「書きなさい。楽しみにしていますよ。福山さんが今一番書きたい事を書くのが一番です。あなたは書くことが沢山あるでしょう。図書館友の会のこともいづれ書いてください。」

「としょかん村3号」に点訳絵本の手びきのことを書いた時、「しろくまちゃんのほつとけき」点訳絵本が出版された事について私の意見を書いた。『点字つき絵本と普及を考える会』を立ち上げられた出版社の編集者に送りなさいと余分に3号をおくってください。（おかげで、編集者の一人の方と話をすることができた）

「としょかん村8号」にアーティストを目指した盲目の青年白井翔のことを書いた時も「翔君、翔君」と原稿を読んで、良く知っている子のように話題にしてくださり彼の死を悼んでくださった。

次号のめ切が早すぎて悲鳴をあげたが、下手な文章でも書く機会を与えてくださったことに今は心から感謝している。

今回の「びはの左大将」の原稿について、感想をお聞き出来ないのが残念です。

(ふくやま・きょうこ／としょかん村同人
わんぱく文庫主宰)

図書館の場を考えること

大災害と復興、都市と図書館、いま感じていること

寺田芳朗

震災、原発事故、南相馬図書館を想う

東日本大震災から2ヶ月が経つ。報道は注目性が高く映像や言葉でわかりやすい被害を繰り返し紹介している。専門雑誌は、マンション地震被害は5県で250件以上だ、とか、外見に変わらない公共施設でも天井が崩れたり硝子や照明が飛散しているとか、図書館では本棚が将棋倒しになったとか、学んで対応しなければいけない（枝葉末節と片付けられない）話の山積み 시작했다。場の計画を仕事とするので、日常は森を仰がず一本一本の木を見なければならぬ。

『大聖堂』（ケン・フォレット著）にいわく、「神に祈れ、但し手ではキャベツを植えよ」復興という偉業も同じ箴言の延長にある。

考えれば、誠に不思議で有り難い縁で、福島県南相馬市（かつての原町市）のかたがたと風土を、旧友やなつかしい故郷だと感じるようになっていく。2005年の初夏からの図書館づくりで、常磐道を通って4年、竣工して2年。誠実で地に足のつく生き方を大切にする気風、象徴的な野馬追い祭り、阿武隈の山並みから降りる清涼な空気と伏流水の香気、雑音の無い原ノ町駅前を想う。その美しい土地と生活が、地震と津波と隣町の原発で4つに分割されているという。天のお目こぼしか、図書館環境と境界には被害が無いものの放射能の心配は消えない。奮闘されている安齋館長、早川副館長ほか精鋭の図書館員、鎌田会長や森岡さんたち「としょかんの友」の気持ちと暮らしを想う。今夏、二年検査でまた会えるのだけれど。

災害が人の世をユートピアにするという

『災害ユートピア』（バク・ソルニット著）を勧められて読んだ。北米での災害後の話だ。都会生活に倦んだ人々が、自己の拠り所を再発見して生き生きと他者のために活動を始めた。いつもは行き過ぎた個人主義や差別がこの時ばかりは消えて「社会」が生まれて、帰属する安心と幸福があったという。が、政府や警察はこうした自発的行動を、国民とはパニックをおこすものだと考えて取り締まる。無知な群衆として統治した。

5月17日TV、原発の実態メルトダウンの政府発表があった。発表側が後で非難されないための、信用されない国民への最小限の通知。ここでも官（公）民協働の土俵である情報開示と行政の文化化は窺えない。そうだと、としょかんの世界の話と同質だと思ひ返す。課題を受け止めて解決をしてゆく主体は、政府や自治体ではなくて国民市民なんだよ、それを一緒に支えるのが新しい公共（サービス）なんだよと喧伝したのはだれだったのだろうか。私たちの社会で起きていることは、すべてに同質性がある。

そういえば私の初輪転法・アリバイ作り

アリバイ作りのようなお役所仕事について考えているうちに、35年も昔で時効と思うが、私のそれを想い出す。卒業の為A4版200頁以上の修士論文が必要だった。アイデンティティ、当時それは研究として前例も方法論も無く、「素朴な疑問」だけが推進力の果敢な出口のない取り組みで、「都心環境の変化とアイデンティティ——横浜中心部1923～78・復興と横浜らしさ」が題名だった。私は三代の濱っ子の末裔で、祖父母や両親から関東大震災と横浜大空襲（1945年5月29日米軍は横浜市中心地域を空襲。

B-29爆撃機517機・戦闘機101機による焼夷弾攻撃で死者1万名という。)の話の聞き育った。つまり、明治以来形成された横浜都心部は二度も地震爆撃火災で灰燼に帰零している。それでも戦後30年1975年頃の横浜は、市電が消えたが三菱ドックと伊勢佐木の街の灯は明るくて、なにより東京とは違う空気、横浜らしさ(という言葉にできない何か)が、街には充ち満ちていた。三度も蘇生する横浜らしさとは何か。いよいよ始まる東京移植のような都心「みなとみらい21開発」は何か欠落していないか。都市のアイデンティティという成長遺伝子はどのようなものか。当時は工学部で書くべき論文でもないし、無謀を思い知る結果だったが、ささやかで私に大切な発見もあった。それは自身の興味の方角と、都市計画や建築営為の向こうには人々の生活(ミーニング)の積み重ねや、都市のパブリックイメージについて人々が共感し無言で確かめ合う見えないしくみがあるのではないか、ということであった。後年に、都市と図書館は同類で「しくみ」であり人に係る成長システムだと知った。

『敗北を抱きしめて』(ジョン・ダワー著)

朝日新聞2011/04/29のジョン・ダワー氏インタビュー記事「歴史的危機を超えて」を興味深く読んだ。<第二次世界大戦の前には、1923年の関東大震災がありました。(中略)このふたつの歴史経験が私たちに教えるのは、日本人は悲劇から新しい創造的なものをつくり出すことができるということです。今回の東北の悲劇からも、同じように立ち直る事を期待しています>2002年ピューリッツァー賞を受賞した著作には、戦後生まれの私には本を閉じなくなる苦い事実の記述もあるが、社会的生き物の人間が都市と都市生活を築いてゆく、前述の小説『大聖堂』につながる感動がある。<敗戦後、疲労感と失望感が数年間も続いたが、これは敗北による心の傷が長引いた

というよりは、むしろ戦時に蓄積した疲労が、戦後の指導層の無能とあからさまな腐敗によって増幅されたためであった。長い歴史の尺度で見れば、敗北からの日本の復興は急速であった。しかし、一般の民衆にしてみれば、戦後復興はあまりにも進展が遅く苦痛に満ちたものであった>とある。全てに伏す同質性だ。東日本復興の物語りは痛みにも希望の裏打ちが欲しいと祈る。

私たちの学び、これからの備え

図書館建築の金字塔、1961年八戸市立図書館の計画理念とピロティ建築の地震へのもろさが図書館史をどう変えたか、佐藤仁教授の講義を思い出している。1968十勝沖地震、1978宮城沖地震、1995阪神淡路震災、2007中越沖地震、建築の圧壊下敷きで人命が失われる事態は建築構造規準の法律改正で、新しい建築からは聞こえない。しかし今震災でも、天井内装や照明の落下、スプリンクラー作動による水害、開架や閉架の倒れやすい書架の形状、など経験済みで指摘されてきた課題があった。研究工夫対応が足りず被害を繰り返したことに、場づくりを学ぶ私達側の反省が必要だと感じる。

2007年11月、図書館総合展で「図書館と図書館員のためのサバイバル講座」という催事があった。犯罪やトラブルに並べて、災害からの危機管理を解説するように求められた。聞いてくださる方々は、既にある図書館施設でどうするかが必要なのだから、建設時期による危険度具合、運用管理にあたっての防災知識、過去災害の事例紹介をした。施設の設計者と未永く付き合っ、時々一緒に歩いて助言を貰って下さいなどもお話しした。近年できたの建築に居られたり、これから建てる計画の方々には、建築造形的な新しい試みの提案に図書館ならではの経験から防災チェックが必要だと事例を総括し漫画紹介したのだった。次の頁を拡大鏡でご笑覧いただけるだろうか。

ホ、火災煙と避難；建物用途で違う防災設備。

- ◎公共図書館は500㎡毎に下り壁で区画排煙、煙にまかれず避難できる。
- 火災報知や煙感知連動や手で排煙高窓が開放され煙が充満しないか？
- 二方向の避難通路は確認してありますか。ホークサインは見えますか。
- 常閉防火防煙区画の鉄扉をくさびやガンボール箱で常開にしてませんか。
- 学校大学図書館は排煙設備・非常照明が未設置でも法的に可能。それは、不特定多数の利用者でなく、避難訓練が十分で、職員も常時居る前提。
- 夜間利用させる場合、学校施設でも非常照明が安全上は欲しい。あるか。

- ▽現状の防災・避難誘導設備の現状を皆で確認しておきたい。
- ▽夜間閉館や職員が居ない貸し部屋の利用、「その時」を想像する。
- ▽安全設計、設備点検、運用訓練、管理責任の明確化が必要となる。

●公共図書館、学校の部分である小中校の図書室や大学図書館、建物の種類で整備すべき仕様設備がずいぶん違う。

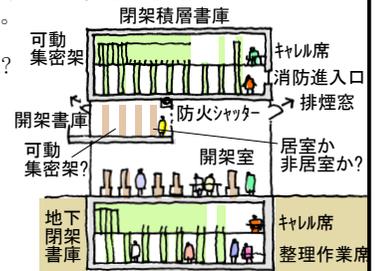
	公共図書館	公共図書館の書庫	各学校の図書室	学校校の図書室
採光窓面積	床面積×1/10	不要	床面積×1/7	不要
換気窓面積	床面積×1/20	不要	床面積×1/20	不要
排煙窓面積	床面積×1/50	不要	不要	不要
非常照明	必要	必要	地下以外不要	地下以外不要

へ、「書庫」の安全機能・設備も一様ではない。

- ◎図書館雑誌の座談会記：困った利用者(大学?)が書庫の窓から顔を出して煙草を吸う。とある。漏電失火、放火、(近年の公開利用書庫は居室並安全設計が増えた。利用形態の変更が怖い)
- 「二層までの積層書庫は柱・床も耐火構造でなくてよい」緩和主旨と現実は？多層の鉄製書庫で出火すると書庫内全焼。書庫内研究席に避難路案内は？
- 巨大な大学書庫は排煙設備・非常照明が未設置でも法的に可能。それは、不特定多数の利用者でなく、避難訓練が十分で、職員も常時居る前提だが。
- 災害で停電になった場合、地上の大学書庫でも非常照明が安全上欲しい。

- ▽旧来の防災設備で書庫に滞在させる危険を皆で確認しておきたい。
- ▽書庫等の可動集密書架は大地震で動いた。利用者を近づけてよいか？
- ▽大地震で書庫内の本が通路を埋める例あり。利用者避難路の検証を。

●倉庫扱いだっただ書庫に変化が出てきた。閉架書庫、公開型書庫、準閉架は安全か。

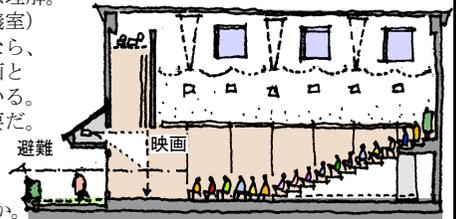


ト、図書館の会議室・視聴覚室の造られ方。

- 公共図書館の視聴覚室等は職員が主催し特定者利用で安全だとの法理解。(通称として、○○ホールや大集会室の室名でも、法律申請上は会議室)
- もし不特定多数の利用者や団体に対して、部屋貸し利用をさせるなら、法律上は集会施設であり、図書館と異種用途とし、施設の防火区画と直接的避難階段が必要になる。確認申請でそう約束して建築している。
- 複合施設申請であれば当然、防火区画・ルート区画が計画には必要だ。確認申請の前提と異なる利用形態の変更は、災害で人的被害が出れば「管理瑕疵責任」に繋がる。

- ▽建築基準法申請の誓約を破って、利用形態の変化はありませんか。
- ▽災害時の避難誘導の責任は「有償場所貸し」をされた場合でも、図書館と図書館員にあると考えられる。行政の共通理解が必要です。

●会議室・視聴覚室は図書館付属施設。ホール・集会室は建築法上は「異種用途」



視聴覚室では、図書館主催の講演会や映画会だけではなく、.....

チ、法律が想定している図書館・学校施設の安全管理者とその責任

◎設置瑕疵(責任)、管理瑕疵(責任)

図書館施設がどのように防災や安全に配慮して造られているか、建築基準法・消防法などの基準をお話しました。法令は、それぞれの施設の特色と利用状況に応じて安全基準を定めています。そうした施設成立の前提条件について理解が申し送れていない場合や、その施設の活動状態や管理運営の形態が建設後が変わっていくことで、安全機能が担保出来なくなる場合を、計画・設計という図書館づくりの序章に関わる者たちは心配しています。

非直営・多様な職員雇用形態組織・窓口委託・指定管理者・深夜閉館・無人閉館・集会展示系諸室の有償貸し、など20年前では登場しなかった「計画条件言語」が生まれています。また、計画設計建設時点では運営形態が未定という事態までも、異常と考えない行政自治体も出てきました。設計や確認申請の前提・信義が揺らいでいないでしょうか。「図書館を成立させる要件の75%はそこに働く図書館員で決する」と言われて来ました。利用者や資料の安全を危機から守るのもまた75%は図書館に関わる人によるでしょう。実のあるご研鑽後に、図書館の運営責任と成長管理責任だけが図書館員の任務では無くて、危機管理責任もおおきな責務であることを、所属する組織母体にお知らせ下さい。

つまるところ、図書館の安全も「人」次第。

建物や書架など図書館の場づくりの工夫
努力はまだ十分ではない。しかも場を育み、

資料と利用者の安全を守るのは、図書館を
自分達の家だと思い働く図書館員が居るか、
それを支える運営体制か、にかかっている。

2011.05. としょかん村と後付の作文入稿

私の初輪転法などを書いて不遜な奴めと怒られるのだろうか。実は今回の作文で、今更だが自分の物語に気がついた。将来に確信のない18歳の私が、よたよたこの仕事で生きてきた出発点のことだった。恐れ多くもジョン・ダワー先生と似た動機に引き込まれて、建築都市計画を専攻し、不惑を過ぎた頃、図書館づくりも都市計画だと気づいたという話。作文も自分探しだろうか。

5月26日昨晚は日本図書館協会で図書館建築研究会の震災調査報告があった。会場は満席。茨城から岩手海岸部の図書館界隈を踏査された講師から、我が事として受け止めざるをえない現実が伝わる。報道映像が装う客観性や冷静さでは押さえ込めない突き動かされる情動。明日は我が身どころか、今この現実が我が身のことなのだった。

2011.06. としょかん村菅原峻村長の旅立ち

予想もできない菅原村長の旅立ちだった。「寄り掛かっていた壁が急に消えたようで不甲斐なく気持ちが不安定です」と友人達と交信をして、そうだ寄りかかっていたのだと自分を顧みた。日本の図書館や施設の課題は・・・などと偉そうに作文していても、考え行動する図書館人の中心に菅原村長達が居て、私はトロイ応援団のようで、自分の問題として自覚に欠けていたのかと愕然となる。同じ二黒土星だよと励ましてくれた菅原峻村長のトドメの一喝であろうか。

村長は近年、各地の市民友人に話をした。「自分のまちの図書館の物語」を書き記すのは大切な一歩だと。ふと思ったのだが、それでは、菅原峻という「としょかん」はどういう物語として記せばよいのだろうか。

1953.04. 日本図書館協会に奉職されて

「有山たかし生誕百年の今をどう捉えるか。図書館人の連帯は運動体でなければね、」思索行動し確信したスピリット、きのうを今日から明日へどうつなぐかを問いかけた。

1978.12 『現代の図書館』 図書館建築特集

同年春、図書館計画施設研究所を設立。計画から関わられた町田市立、日野市立、昭島市立図書館などの成果が明らかになり、「1953～1978年の公共図書館の建築」執筆。満を持して図書館建築の特集を組んでいる。編集後記は千葉治さん、巻頭は鬼頭梓氏の名文「機能的ということ」。この論文集は何度も下線を引いた私達後進の教科書だ。

八戸市立図書館計画の経緯解説では、菅原村長が同志とされた故佐藤仁教授の文を引用、場の計画に対する真摯で謙虚な設計者の姿勢と観念主義への自省も記している。

1981～2005 『としょかん』 100号の時代

厚さ10cmになる同誌の綴りを再読すると、あらためて現在に繋がる課題が俯瞰される。主人公市民のあり方、図書館の本質である広場性、図書館員と資料世界と施設が持つべき専門性、それら成長してゆく将来像を、「図書館」でなくひらがなの「としょかん」に託した思いが見えてくる。村長自身の労作『市民の図書館』（1970刊）の次のパラダイムを歩きながら考えたのではないだろうか。『新版これからの図書館』1993刊『図書館の明日をひらく』1999刊は、その俯瞰的な問いかけであり、ご一緒した米国や北欧への図書館旅行は若い仲間を育成する手段だった。図書館便りの形を革新し町民対話の図書館像を創出した増田浩次元館長の背を押して『苜田町立図書館の3000日』1997刊を編集し、図書館づくりの協働プロセスや出色の図書館条例を形にした森田一雄元館長の伊万里市民図書館物語を喧伝されたことなども、図書館づくりの現場から立学してゆく菅原村長の真骨頂であったと思い出している。

「図書館を図書館としてつくる」こと

菅原村長の物語に流れるこの通奏低音に共鳴した私達は、少数派だが、この姿勢を墨守して次の世代につないでゆくしかない。

（てらだ・よしろう／としょかん村同人

寺田大塚小林計画同人、代表）

見えない糸に導かれて 菅原さんから手渡されたもの

才津原 哲弘

菅原さんが亡くなられたと電話で知らせてくださったのは、菅原さんの図書館計画施設研究所のある同じビルの同じ階に設計事務所をおき、長く菅原さんの身近にあって、ある時は仕事も共にされることもあった藤原建築アトリエの藤原孝一さんだった。茫然として、藤原さんのお伝えをお聞きしていると、取り返しをつかないことが起きてしまったという思いが私を貫いた。

2年前、菅原さんが深い思いの中で『としょかん村』を始めるにあたって、同人としての参加のお誘いをいただきお引き受けしたものの原稿をお送りできたのは2号まで、しかも、2号に私が書いたのは、「仙台にもっと図書館をつくる会」の代表を長くされていた扇元久栄さんへの追悼の文で、2号だけでは書ききれず、「この稿、続く」と次号への掲載を予告していたものだった。その後、菅原さんからは毎号、『としょかん村』を送っていただいた上、この先、時あれば原稿をとの懇切なお便りまでいただいていたのに、ご返事もしないままにこの日を迎えてしまったのだった。

菅原さんが亡くなられて4カ月が経った10月23日、菅原さんを偲ぶ集いを、九州の地でその会場としてもっともふさわしいと思われる伊万里市民図書館でもった。当日の集いの様子については、犬塚まゆみさんが報告されることになっているので、それをご覧いただきたいが、その集いの案内のチラシの呼びかけは、『菅原峻さんから手

渡されたもの 菅原峻さんを偲ぶ集いへのお誘い』となっていて、その日、行われた座談会が『菅原さんから手渡されたもの』というテーマの下で開かれたのは、九州の地で、菅原さんと出会った一人ひとりが、菅原さんからその人の心に届く確かなものを手渡されていると強く感じられていたからであった。だから、一人ひとりが手渡されたものを語りあい、今、これからの考える場にできればと。実際、集いの中ではどなたもが、今、その人の中に深く生き生きと生きてある菅原さんを語られたのだった。では私の場合は、私が菅原さんから手渡されたものは。

まず、菅原さんとの出会いのことから。24年前になるだろうか、1988（昭和63）年9月17日、周防灘に面した行橋市で菅原さんを迎えての講演会があった。（あの時、私より20歳年長の菅原さんは62歳だった。）苅田町の図書館づくりの前史の活動であったとも思える行橋の図書館を考える会の前田賤さんや神田先生たちが仕掛けた講演会だった。このように書いてきてあらためて、菅原さんと苅田をつなぎ結んでくださったのは苅田町の図書館づくりの前史とも思われる行橋の図書館を考える会の人たちの活動であったことに思いあたるのだが。その日の夜の懇親会の場で前田さんたちと行動を共にしていた隣町の苅田町の職員（公民館図書室にあたる三原文化会館図書室の司書）の山崎周作さんが

菅原さんに翌日、苅田町に立ち寄られることをお願いした。苅田町ではその頃、図書館づくりに向けての動きが始まっていた。

(私自身は、その年の12月1日に準備室発足時から苅田町へ。町立図書館開館は17カ月と11日後の1990年5月12日) 苅田町で菅原さんは、苅田での取組み状況を聞かれる中で、設計事務所の選考が重要だと助言され、図書館建築に経験豊かな数社を紹介された。苅田町では当初、設計事務所の選考にあたっては、町に指名願いを提出していた設計事務所によるコンペで行う考えで進めていたが、一つの設計事務所を除いていずれもがコンペへの参加を辞退、結果的にはその一社、菅原さんが紹介してくださった山手総合計画研究所と特命で契約することになったのだった。今にして思えば設計期間が4カ月ならずとあまりにも短いことが辞退の主たる理由ではないかと考えられるが、図書館建築について、図書館を設計するとはどういうことであるかについて、建築家をどのように選ぶかについて私自身いかに無知であったかの証でもあると考えられる。

このように苅田町で図書館の設計事務所をまさにごりごりの時間の中で選びだし決めていこうと言う時に、1978年3月に25年間勤務した日本図書館協会を退職された後、図書館計画施設研究所を設立して研究所での10年の経験を積まれた菅原さんが私たちの前に立ち現われておられたのだ。よりよい図書館を始めるのに欠くことのできない、しかし日本の多くの図書館ではそのことが正しく認識されていない、図書館計画と施設の研究所の所長として。

こうして私は山手総合計画研究所の寺田芳朗さんと向きあうことになった。設計協議を通して、また特に開館後の利用のされ方を見て、私が深く感じたことは、場の力、空間の力ということだった。場が力をもつということ、空間が力をもつということだ

った。そして図書館に深い思いをもち、図書館建築の豊かな経験をもつ建築家がいることを知らされたのだった。

苅田町で菅原さんから天の声とも言うべき助言をいただいてから、菅原さんと私は日豊線の苅田駅から博多に向かった。そしてその車中で、私はできて間もない『苅田町民図書館基本計画(案)』(当初は町立図書館ではなく、町民図書館としていたが、図書館の設置、運営の責務は町にあることを町民に対して明確にするという考えにたって、苅田町立図書館とした。)を取り出して、菅原さんに手渡して見ていただいた。

この計画書のことを思い返すと、何か不思議な見えない糸に導かれてという思いを深くする。

私は1979(昭和54)年4月から、私にとっては、3館目の図書館の職場となる、博多駅から歩いて10数分の所にある面積232㎡の小さな図書館で働き始めていた。福岡市が20年以上をかけて行った博多駅周辺の区画整理事業が完了したのを記念して建てられたその施設は、財団法人博多駅地区土地区画整理記念会館という長い名前の施設で地域に開放された無料の集会室と有料の会議室やお茶室からなる3階建の施設で、1階に232㎡の図書室(通称、記念会館図書室)を併設していたことから、千葉県内の市立図書館を2年で退職した後、1976(昭和51)年7月から開館して間もない福岡市民図書館で嘱託職員として働いていた私に声が掛ったのだった。記念会館の運営は福岡市から寄付された3億5千9百万円の利息と会議室使用料によって行い、職員の体制は福岡市を定年退職した人を事務局長の他、正規職員(司書)1、嘱託職員(経理)1、臨時職員(司書)当初1、後に2というものであった。当時人口100万人を超える福岡市であったが、市民図書館が開館したのは、1976(昭

和51)年で、市民センターにあったのは公民館図書室で、分館が1館もない状態であった。

私自身は記念会館図書室は、福岡市の図書館の分館と意識してやっていたが、年々歳々、福岡市の図書館をめぐる状況は悪くなるばかりと感じられるようになった。こうした中、写真家の漆原宏さんから「仙台にもっと図書館をつくる会」の扇元久栄さんを紹介され、考える、伝える、広めるの3つの部会のすさまじい活動に目をみはった。また梅田順子さんとの出会いがあり、1987年に梅田さんを代表として、「福岡の図書館を考える会」の活動を始めた。福岡市の図書館政策の作成や「図書館のなしの出前」（「行橋の図書館を考える会」の人たちとの出会いは、出前の注文によるものだった。）、その他、選挙での公開質問状の作成や学習会、講演会など。

4月からは月1回の定例会を記念会館で持っていたが、いつのことだったか、埼玉県入間市の図書館を退職し、福岡に帰ってきていた安川潔さんが、コピーして分厚くなった資料をホッチキスでとめたものを定例会に持ってきた。『鶴ヶ島町立図書館基本計画』だった。私にとって図書館の基本計画を初めて手にする機会だった。そこで述べられている図書館の在りようはまさに私たちが求めるものだと思われた。その資料は苅田に手渡され、それを参考にして苅田町の基本計画が作られていった。そして鶴ヶ島の図書館基本計画は菅原さんの図書館計画施設研究所で作成されたものだった。長い時間をかけて、鶴ヶ島の人たちと熱く真剣な論議を積み重ねて作成されたものだった。先に見えない糸に導かれてと記したのは、苅田町の図書館が目指す基本の形でもある基本計画の作成は、菅原さんのそれまでのよりよい図書館づくりに向けての歩みなしにはなかったとも考えられるからだ。菅原さんとお会いすることになろうとは思

いもせず、私たちの前に示された、私たちが願っていた図書館の在りように向けて、私たちが歩みだそうとした、その先を道なき道を踏みかためて菅原さんが歩いておられたからだ。

博多に向かう車中で、事前の連絡もご了解も得ず、このような形でと、手渡しした苅田町の基本計画案を見て、菅原さんが「何かどこかで見たような」と後日、この時のことを『としょかん』だったかに記されているのを目にし、ほんとうに何ということをしてしまったのだろうと言葉を失うばかり。それにも拘わらず菅原さんは、設計協議の最後の場にも立ち会ってくださり、基本設計案についても、菅原さんの意見を示してくださった。苅田町立図書館の誕生にほんとうに菅原さんは産婆さんのように立ち会ってくださったのだと、今にして思います。

そのようにして生まれた苅田町立図書館を私は開館5年後に、私にとっては思ってもみなかった経緯で退職し、琵琶湖の畔の苅田町より、より小さな人口2万3千人の町で、図書館の開設準備にあたる場を授かった。苅田の図書館では、司書として私がかつとも願っていた、すべての住民の身近に図書館をとすることを、人口3万3千人の町で2つの分館と1分室、そして移動図書館という形で、そして図書館の命である資料費については4千万円を超える予算の確保を、住民の皆さんの図書館への深い思いや、図書館での上司や共に働いた人たち、そして町長はじめ行政の理解、協力に支えられて、ほぼ基本計画で目指した形で歩めたのではなかったかと思う。もちろん書庫機能を持った地域館の建設や図書館の利用にハンディキャップのある人へのサービス、そして学校図書館支援など、取り組むべき大切な課題がたくさんあったが、町民の利用は、私たちの想定を大きく超えるものだ

った。それについては、司書である私たちが考える以上に町民のお一人ひとりが図書館をより強く、より深く必要とされていることを知らされたのだが。

荊田町の図書館を辞めようとした時、実に多くの利用者の方から、そして館長や図書館で共に働く人から、そして町長の沖勝治さんからは町長室に呼ばれて、なぜ辞めるのかと、留まるようにと強いいわれました。その声に応えることなく退職し、お世話になっていた菅原さんにも、経緯も何もお知らせもせず滋賀に転居したのだと思う。

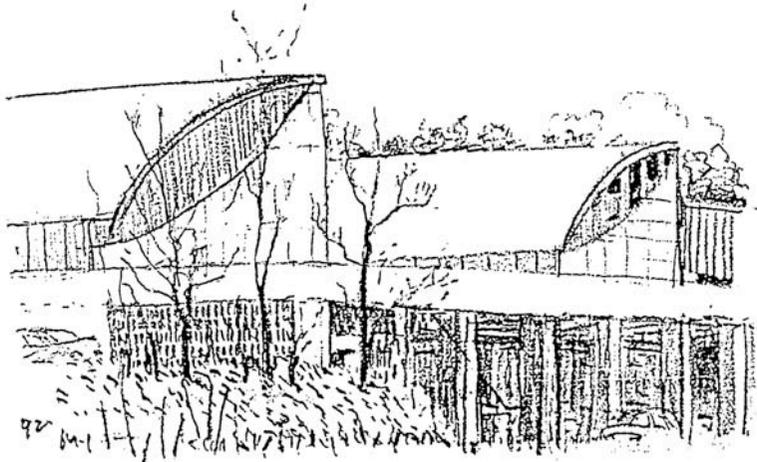
私が転居の知らせをしたのだったか、いつだったか能登川に菅原さんからいただいたお葉書のことは忘れることがないだろう。「私は、この度の滋賀行きについてはよいと思う。」との趣旨のお言葉にはっとした。まだまだ学ぶべきこと、歩んでつきあたるべきことが多くあるのですよと、そのように心に刻まれるお言葉だったと思う。筆不精甚だしく、何のご連絡もご報告もしないものに、遠くの地からこのように思いにかけてくださり、長い時間の中で考え歩むことを、そのような歩み方があることを示してくださったように感じ、背をそっと押される思いだった。

今、突然、「才津原さん、ほんとうにしようがないんだから」と明るく笑う扇元久

栄さんのあの少女のような素敵な笑顔と菅原さんの静かに苦笑された笑顔が私の心に浮かびました。「菅原さんがあんなにも首をながくして、懇切に思い深く、あなたからの原稿を待ってくださっていたのに、ほんとうになんということでしょう。わたくしへの長いお題のお手紙（「悼詞 きれいにすきとほつた風と、桃いろのうつくしい朝の日光を 生涯の糧とした扇元久栄さんへの手紙」）の続きは、いつ届くのかしら。わたくしがおおかけをした大好きな井上ひさしさんと、そしていつもいつも頼りとしていたすがわらせんせいとご一緒に あなたの遅い遅い原稿を待つことになろうとは思ってみなかったわ。あなたからのお手紙がとどくのを待ちくたびれたので、わたくしのほうから、井上ひさしさんのおことばをお贈りします。」

むずかしいことをやさしく、
やさしいことをふかく、
ふかいことをゆかいに、
ゆかいなことをまじめに書くこと

これはいつか仙台のお住まいをお訪ねした時に、井上さん自筆のものをを見せていただきましたね。なんだか菅原さんが図書館を語られる時の言葉を思いますね。そういえば、私のいつも身近にあり、付箋だらけ



の本は、菅原さんの声がいつでもきこえてきて、何か考えることがあると、そこに何かヒントを授かる『としょかん 復刻版』と『MOTTO 100』上下巻です。上巻の裏表紙に一言をとお願いしましたら、こんな言葉を書いてくださいましたね。

マーフィの法則 日めくりカレンダーより

1994年(平成6)6月6日

「なんでも長いこといじっていると

動くようになる」

1994年6月23日

「なんでも長いこといじくりまわすと
かならず故障する」
この二つのマーフィの法則の間を振り子の
ように揺れながらバランスをとって現在に
至っているようです。

扇元久栄 2005・10・17

菅原さん、扇元さん。ほんとうにありが
とうございました。いのちある限り、お二
人の後を歩んでまいります。

(さいつはら・てつひろ/としょかん村同人

元滋賀県能登川町立図書館長)

菅原さんから手渡されたもの 追伸

いつの頃からか、私の中にいつもある自分自身に対する問いかけ、それは、「地域に図書館があるとは、どういうことか」であったこと、そのことを折に触れて考え続けてきたことを、この度、読み返した菅原さんの『図書館の明日をひらく』(1999年10月)を手にして、あらためて思った。このご本の中で、菅原さんはすでに、書いておられたのだ。

〈図書館がある〉とは、〈図書館の看板の下がった建物がまちにある〉ことではなく、そのまちの隅々までサービスが行きわたっていて、いつでも、だれでも、どこに住んでいても、どんな資料でも利用できる、その態勢がととのっていることをいう。

むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく。

そのような図書館は、決して天から降ってくることはなく、私たちがそれを手にするには何をなさねばならないかについても、明晰に、ふかいことをゆかいに、ゆかいなことをまじめに書いて、私たちの前におかれている。北海道から沖縄まで、またアメリカや北欧の地を歩きに歩くなかで紡ぎだされたものだ。

1995年3月、琵琶湖の畔にある能登川町で、図書館・博物館の基本構想の策定

にあたった時、「私たちが目指す図書館(図書館サービス7つの目標)」として次の7つを掲げた。

- ① すべての町民の暮らしに役立ち、暮らしを高める図書館(いつでも、なんでも)
- ② 誰でも利用できる図書館(だれでも)
- ③ 住民の身近にある図書館(どこに住んでいても)
- ④ 親しみやすく利用しやすい図書館(一度行けば二度ゆきたくなる図書館)
- ⑤ 町民の'広場'としての図書館
- ⑥ 知る自由を保障し、利用者の秘密を守る図書館
- ⑦ 町民と共に育ち、町民が育てる図書館(町民の、町民による、町民のための図書館)

とりわけ私が考え続けてきたのは、町民の、町民による図書館とはどういうことか、ということであったが、このことについても、生涯をかけて語り続けてくださった菅原さんの言葉が私たちの前にある。

図書館は本の森

森をそだてるのは わたしたち

そして、ゆっくり、着実に!

菅原さんから贈られた言葉を心に刻んで、ゆっくり、着実に、そして日々ゆかいに歩いていこう。

日々是好日

山崎周作

某月某日・・・はれ 寄贈

天気も上々で気持ちのいい青空のもと、畑に出て「カボチャ」と「スイカ」の苗を植えることにした。

頭上では「ピーヒョロロ、ピーヒョロロ」とトンビの鳴く声。

見上げると、中庭にある大きなクスの樹のテッペンをくると輪を描くように飛んでいる。

うちのクスの樹は山から降りてきたトンビたちの中継地になっているようだった。

いつもなら、縄張り争いも盛んで「ガア、ガア」とダミ声で鳴くハシボソカラスとの空中戦が見られるが、今日はそんなこともない様子で穏やかに優雅に空を舞っている。

因みに、「カア、カア」と鳴くカラスはハシブトカラスと言って都会に住むカラスらしい。

そんな他愛のないことを考えながら、畑仕事に精を出していると、頭上ではなく、後方から人の声。

「山崎さ～ん！」

振り返ると革のジャンパーを着た年輩の男性がこちらに向かって畦道を歩いてくる。

田中了一さんである。田中さんは、こみやこ町の隣、行橋市の住人である。

以前、物産所で図書館利用者の方が、「図書館に勤務されていた山崎さんです。今は風蔵という文庫をされていますよ」と私を田中さんに紹介してくれた。

それ以来、田中さんは「風蔵」に足を運んでくれる。



早速、クワを置き、軍手ははずし「風蔵」へ招いた。田中さんはソクソクと小走りに、一旦車へ戻り何か荷物を抱えて「風蔵」に入ってきた。

彼が抱えていたのは多量の本だった。

彼は、下記の著書を刊行した在野の歴史家である。豊日別神社の近くに住んでいて豊日別神社のことを調べ始めたことがきっかけで歴史に興味を持ったという。

第1集 豊日別宮

高天原は秦王国に存在した 平成元年

第2集 豊日別宮

高天原と日本誕生を説く 平成8年

第3集 豊日別宮

女神信仰と耶馬台国 平成12年

第4集 豊日別宮

天孫は耶馬台国に降った 平成20年

今回「風蔵」に持ってこられたのは、第4集だった。

私は尋ねた。

「それで、この本をどうなさるのですか？」

「いえ、他でもありません。この本は寄贈です。『風蔵』と『図書館』へ」

「図書館？」

「エエ、山崎さんは以前、図書館に勤務されていたから、図書館には詳しいと思ひまして。それで、私の書いたこの本を都合の良い時でいいので、各地の図書館に渡して

いただけないでしょうか、無論、寄贈です。もちろん、無料です」

気持ちはよく解ったが、図書館に勤務していた私としては図書館にご本人が来てくださって、本に対する思いをお話いただき、寄贈して下さることが一番嬉しいと考える。

ゆえに、もう一度田中さんに本人が出向くことを勧めた。

「寄贈は図書館にとって、とてもありがたいものです。地域資料は図書館の宝ですから。だからこそ、田中さんがご自分で書かれた貴重な本、ご自分で持って行かれたらいいですよ。そのほうが、図書館職員と話しもできて思いが伝わりますから」

そう、言い終わらないうちに、田中さんの顔が暗くなった。

「いえ、私も図書館に持って行ったことは行ったのです。でも・・・」

あ～、なんとなく解る。今の図書館の対応。目に浮かぶ様である。図書館に一度でも関わったことのある私は急に恥ずかしくなった。

「山崎さんだったら、持って行っていただけるかなと思って。大変とは思いましたが、持ってきてしまいました」

「とんでもないですよ。大変だなんて・・・でもですね、中には寄贈をとっても有難く受け取ってくれて、田中さんの気持ちがパ～っと明るくなるような図書館もありますから」

いつの間にか、図書館を擁護していた。

数日後、私は「寄贈本」の旅にでることとなる。

某月某日・・・くもり 三人三様

電話のベルが鳴る。

受話器を取ると向こうから懐かしい声。

「山崎さん、光畑です」
光畑眞哲士さん。行橋市職員を退職後、2

010年4月から行橋市図書館の館長になった方である。

「お～、光畑さん。元気ですか？」

「元気ですよ。今日は他でもない、白根さんから電話があつて、図書館に来るといふんです。山崎さんにも連絡して3人で会おうということになって。急で悪いけど、今日こられる？」

「いいよ。所詮半農半Xの身。こんなときは自由だからね」

バタバタと「風蔵」と「畑」の用を済ませ、車に乗り込んだ。

犀川盆地の中央を流れる今川沿いの県道34号線に車を走らせながら考えた。

『う～ん、懐かしい。自分が、苅田町の図書館開設準備をしていたころ、光畑さんも図書館建設の準備をしていたなあ～。白根さんは、福岡県立図書館の司書で1990年には、小郡市立図書館に派遣され運営に携わっていたし・・・』

そんなことを巡らしているうちに「コスメイト行橋」が見えてきた。

「コスメイト行橋」とは歴史資料館・視聴覚センター・文化ホールと図書館が複合した施設の愛称である。図書館はその中の1階にある。

駐車場に車を止めると丁度、白根さんとバッタリ出くわした。

「ヤァ～！」と声をかけあう。

2人で図書館に向かい、光畑さんに声をかける。

「ヤァ～、元気？」

元気かどうかは電話で確認済みなのだが、還暦過ぎの三人組は懐かしさが尽きない。

コスメイト内の喫茶でお茶を飲みながら、四方山話に時間を費やす。もちろん、図書館の話である。

白根さんは、島根県斐川町の図書館長から福岡県宮若市の図書館準備に携わったが、(現在建設工事中)開館を待たずして、大学

の図書館司書養成の教師の道に進んだこと。

行橋市図書館は、2006年4月に指定管理者（財団法人行橋文化振興公社）が導入された。光畑さんはその図書館長として再び図書館サービス継続中であること。

私は老老介護しながら「風蔵」と「農業」の半農半Xの生活を送っていることなど。

三人三様であった。

今日は、実に懐かしい一日だった。

今後、私も図書館に関わることがいつまで続くのか？とてもしみな気持ちになった一日でもあった。

某月某日・・・くもりのちはれ

収集・保存

今回の東日本大震災により千葉県で液状化現象が起きた。

テレビでは、あまりにも悲惨な現象が報じられていた。マンホールは、浮き上がり、駐車場の壁はズリ落ちてしまっている。

なんとも不思議な現象ではあるが、地震の影響をうけるとこのような事態が起こるらしい。

図書館で有名な浦安市も例外ではなく、広く液状化していた。私が浦安と聞くと竹内紀吉さんの「図書館の街 浦安」を思い出す。図書館が浦安に生まれる奮戦記であるが、私の図書館づくりには欠かせないバイブル本の中の1冊であったからだ。

話は戻るが、その液状化にともない、各地の図書館に問い合わせが殺到し、古い地図の閲覧希望が後を絶たないという。

自分の住んでいる地域が以前、どういう土地の形状だったのかを調べるためである。液状化が起きる土地は昔、沼や湿地であることが多い。そのため自分の住んでいる土

地を知ろうということらしい。

こんなときもすぐに対応できるのが図書館の資料である。最も大切なことは、対応できる図書館が身近な地域にあるということである。

今回、東日本大震災という未曾有の震災により、図書館に住民が殺到するという現象がおきたが、今後もこのようなことは起きてくることは否定できない。

図書館側も、思いもよらない住民のニーズにでもすぐに答えられる収集・保存を心がけてほしいと思う。

某月某日・・・はれ エネルギー

今日も、3月11日に発生した東日本大震災の話につける。

あの日以来、震災にともなう原発事故の深刻なニュースが気になってしかたがない。

今、原子力発電の安全神話は崩れ去り、「原子力に代る自然エネルギーの開発」という議論が起きている。

太陽・水力・風力・地熱・バイオなどのクリーンで再生可能なエネルギーを見なおそうというものだ。

以前から、自然の力を電力に変換するという発電システムには、私も興味を持っていた。

九州は火山が多い。それを利用して日本の地熱発電の40%が大分県や鹿児島県を中心に生み出されている。とりわけ、大分県別府市には、ホテル独自に地熱発電を行っているところもあるほどなのだ。

水力発電は、急流を利用し発電が可能な地形が九州には、数多くあるそうである。

太陽光発電に関しては、太陽の光エネルギーを利用するための自然的条件に最も恵まれた気象特性を持っている。

そのため柳川市、嘉穂町（現嘉麻市）、遠賀町、糸田町などの図書館が太陽光発電システムを取り入れている。

私が勤務した豊津町立図書館（現みやこ町中央図書館）は、開館当初から太陽光発電システムを導入していた。

豊津町立図書館は、標高60mの高台上に立地する丘の上の図書館で館内使用の電力の一部を平屋建て屋上の三連の三角屋根に、太陽電池板（1.3m×1m）60枚を約30度の傾斜で南向きに設けている。

館内のエントランスホールのギャラリー側の壁面には、日照強度や出力電力を電光掲示している。館内のパソコン画面では、自然エネルギーを電力へと再生利用する流れ（太陽電池→直流直交変換装置→交流→受電設備→館内の電力使用）と太陽光発電に伴う二酸化炭素排出抑制量などがひと目で理解してもらえるように解説している。

発電量は、約10kwで館内使用の約10%の電気量を生み、一日に40Wの蛍光灯250本の電力を賄うことができた。

図書館が先駆けて、このような環境で再生可能なエネルギーをつくる。

それと同時にエネルギー問題に興味を引くような資料も豊富に備え、住民のひとりひとりが学び、原子力発電の安全・必要性とともに代替え発電のことも考えていかなければならないのだと、ここにきてまた一層思う。

某月某日・・・くもり 雑貨たち

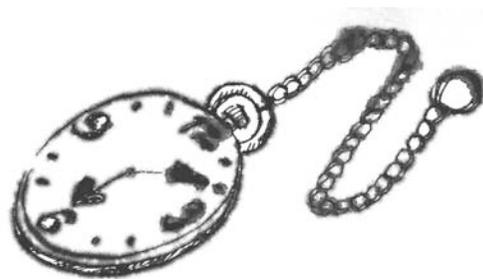
ギャラリー「みどりの館」から定期的に案内状が届く。今日もいつものように「第3回水彩画の祭展」の案内がきた。早速、心の保養にでかけるつもりだ。

私には「みどりの館」に、もうひとつ楽しみがある。

それは、1階の喫茶横で展示販売している「雑貨工房 りとる・ターシャの手づくり雑貨」。

忙しい中、私の原稿にカットを添えてくれる川野留理子さんが主宰している工房の雑貨である。

川野さんの雑貨には小さくても大きな世界があり、とても暖かく気持ちがこもっている。その作品群に出会うことも楽しみにしながら「風蔵」を出ることにする。



数年前、菅原さんが「風蔵」に来られたとき、父がことのほか感激し母屋の座敷で二人並んで写真を撮ったことがある。

そんな父も昨年7月に他界した。菅原さんの訃報が届いた一か月後のことである。

生きてきた道は全く違うけれど、まさしく同世代の二人だった。このときの写真は、私のかけがえのない宝となった。

宝といえば、菅原さんから頂いた一枚の葉書もそうである。それにはこう書かれていた『絶えなき 友情のあかしに！』。

息子ほど年の離れた私になんと恐れ多い言葉であろうか。しかし、それ以上に心が高鳴ったことを覚えている。

菅原さんからの葉書は、もう二度と来ることはないであろう。だが、菅原さんから生前に受け継いだ大量の図書館資料・書物などが日々私に語りかける。

菅原さんは私の記憶の中に蘇り語りかけ励ましてくれるのだ。

私も今、貴方に送りたい『絶えなき友情をありがとう』と。

（やまさき・しゅうさく／としょかん村同人
風蔵蔵主／元福岡県豊津町立図書館長）

北海道の偲ぶ会から

6月24日菅原峻氏ご逝去の報せ後の8月、全国各地で「偲ぶ会」をとの動きに合わせて石狩市民図書館副館長の丹羽氏と相談して、北海道での開催準備を進めてもらった。

9月2日、菅原氏の定宿だったホテルのレストランに参集した14人の顔ぶれは、

- ・図書館職員&OBの 石沢、大島、樋谷、丹羽、土井、岩城、清水、佐々木、
- ・市民の会市民運動の 佐賀、堀江、合田、
- ・図書館建設関係では 楠野、佐々木幸枝、
- ・ニセコ町在住で菅原氏の従姉妹菊池昌子さんも参加され、短歌や幼少時の貴重な思い出にも触れることができた。参加者が綴る思い出の一言からは、菅原氏が撒かれた図書館の種の大きさを裏付ける人脈の厚さとその影響を知った。

皆さんとのお話の結論は、図書館設立や運営への悩みを通した在るべき姿、市民との関係、建設や関わる者達を含む各々の立ち位置における共通の目指すべき図書館の

基本基礎、これらを共有して理想の図書館実現を学ぶ機会を菅原氏は皆に与えられたのだということだった。

菅原氏のご業績は想像に難しくはないが、今でさえ社会から理解の薄い図書館の歴史を背景に、恐らく地を這うような使命感に支えられ、長期にわたり日本全国の図書館理解者達の橋渡しを担って来られたのだと思う。ただ、今見渡せば菅原氏に代わる後継者が育っていないことがつくづく残念だ。

開拓者魂の地域、北海道の大地から生まれた菅原氏の大きな足跡とご功績を心から讃えたいと思う。有難うございます、そしてお疲れ様でした。ご冥福をお祈りします。

(合田美津子／としょかん村友人

のぼりべつの図書館を考える会)



菊池昌子(ニセコ町) 石沢修(共和町) 大島教子(札幌市) 合田美津子(登別市) 佐賀絹江(札幌市) 堀江三千代(当別町) 樋谷文芳(蘭越町) 佐々木幸枝(札幌市) 佐々木孝一(江別市) 楠野泰弘(札幌市) 土井道子(栗山町) 岩城信吉(札幌市) 清水千晴(石狩市) 丹羽秀人(石狩市) (並び順不同)

福岡の偲ぶ会から

「ゆるゆる ふっくら 根太く」 歩み続けます



県立図書館の一室をお借りしてささやかな祭壇を設置

・ ・ 市民の顔が見えると言うのは、お客さんとしての市民の顔ではありません。図書館の主人として、図書館としっかり向き合う顔です。そして、「これは私の図書館だ」という、台風で言うならば図書館を目とするような市民の渦が、1つ1つの図書館に欲しい。それがどんな小さな図書館であってもです。そういう時代が来てはじめて、図書館は住民のものとなるでしょう。ではまた10年先にお会いいたしましょう。

2006年に私たち「身近に図書館がほしい福岡市民の会」が10年の活動記録として発行した『お〜い 図書館!』に寄稿頂いた菅原先生のお言葉です(抜粋)。タイトルは「房総の一隅で図書館への愛をつぶやく」

“10年先に”と言うお言葉は残念ながら頂けません。先生は逝ってしまわれました。

あれから6年がたち「図書館を目とするような市民の渦」を作る迄にはとても到りませんが、先生が常々おっしゃった「運動は“ゆるゆる ふっくら 根太く”歩む」お言葉を胸にあきらめることなく、歩み続けましょう。

偲ぶ会は昨年10月20日、福岡県立図書館で開催しました。主催は福岡、大分、山口の図書館市民団体で構成するフォーラム「住民と図書館」です。

当初は伊万里、佐賀、諫早の皆さんにも呼びかけ一堂に会したいと考えていました。かつて先生はばらばらだった市民団体を繋いで下さりフォーラム「住民と図書館」が発足、開催を通して伊万里や佐賀、諫早の方々との交流が今もあるからです。しかし日程の調整がつかず、結局フォーラムメンバーだけの開催となりました。事前に資料を作成し、参加者と県立図書館には配布しました。

当日の参加者は、宮若市の高山さん・本多さん、由布市の千竈さん、糸島市の水口さん・才津原さん、古賀市の倉掛さん、中津市の今井さん、粕屋町の本田さん、福岡市の力丸です。ご都合で参加は叶いませんでしたが、元荏田町立図書館長の増田氏からは先生との思い出が認められたお手紙と偲ぶ会へご厚志を頂きました。柳川市の平川さんからも先生への思いを書いたお手紙を頂きました。



皆さん笑顔で先生を偲びました

参加者からは菅原先生を通して学んだことや図書館への思いが語られ、菅原先生が多くの人の中に、さまざまな形で図書館の種を蒔かれた事を改めて知りました。

(力丸 世一／としょかん村友人)

身近に図書館がほしい福岡市民の会)

伊万里の偲ぶ会から

菅原峻さんから手渡されたもの

1996年、古希を迎えられた菅原峻さんは、サミエル・ウルマンの「青春」という詩を披露されました。

“青春とは臆病を退ける勇氣
安きにつく気持ちを振捨てる冒険心を意味する
ときには20歳の青年より70歳の人に青春がある
年を重ねただけで人は老いない
理想を失うとき初めて老いる”

菅原さんは、この詩のとおり理想の図書館を説き歩く生涯青春の人でありました。最後まで図書館の本質を唱え続け、4月には伊万里で、7月には諫早で講演をされる予定でした。

「偲ぶ会」は糸島市の才津原哲弘さんを中心に発起していただき、平成23年10月29日伊万里市民図書館で開催しました。東京から大澤正雄さんを迎え、市民や図書館員合わせて25人が集いました。

参加した人一人ひとりの胸の中には「私の菅原峻さん」があり、時の経つのも忘れて語り合ったものです。

「偲ぶ会に参加して元気をもらった」

「初心に返って、また図書館のことを考え続けたい」

「菅原さんが、みなさんに会わせてくださった。これを機会に原点に戻りたい」



九州と菅原さんとの遙々長い歩みを感じられる「偲ぶ会」でありましたし、さらには、これから私たちはどこへ向かって歩いて行くべきかを確かめ合う会でもありました。

「みなさん、すべてこれからですよ」といういつものあの菅原さんの声が聞こえてくるような気がしました。

参加者は次のとおりです。（敬称略）

柴田幸子（福岡市）才津原哲弘、川浪正子
池口由美子（糸島市）境千恵子（柳川市）
田原真弓、真崎美枝、中古賀葉子
天野みゆき、岩野直美、山田則子（諫早市）
池田真由美（長崎市）平松伸子、松尾文子
鈴山幸子、岡田政昭、盛泰子、国武みどり
原みゆき、前山ノブ、古瀬義孝、中島江
徳久美穂子、犬塚まゆみ（伊万里市）
大澤正雄（東京都）

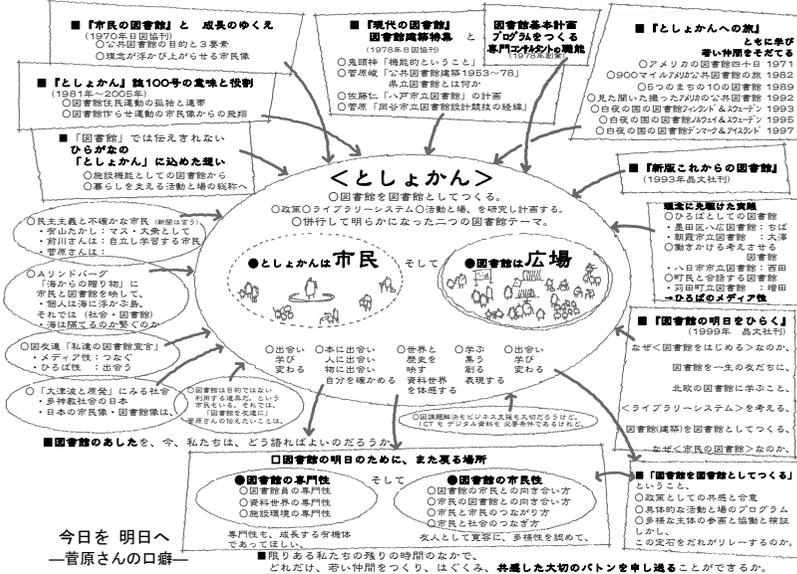
（犬塚 まゆみ／としょかん村友人
図書館フズいまり／前伊万里市民図書館長）



東京のしのぶ会から — 図書館の明日をかたる集い —



菅原峻さんをしのぶ会 — 図書館の明日をかたる集い —
菅原峻さんが歩いて見せた図書館村地図



菅原峻さんをしのぶ会

— 図書館の明日をかたる集い —



主催: 菅原峻さんをしのぶ会
 発起人: 代表 西川馨・阿曾千枝子・大澤正雄・小川徹・千葉治・島雄康一郎・野本道子・藤原孝一・松岡要
 日時: 2012年1月23日(月) 会場: 12時半から16時半
 場所: アルカディア市ヶ谷 (私学会館)

菅原峻さんが2011年6月24日84歳でなくなりました。
 菅原さんは1926年北海道生まれ。上京して1953年3月文部省図書館職員養成所卒業、同年4月日本図書館協会に勤務、1978年3月総務部長で退職。図書館計画施設研究所設立。多くの図書館計画設計にかかりました。いくども多くの人たちとともに先進国の図書館事情視察の旅に行ってきました。同時に、各地で図書館を求め、市民のためのサービスを求めて運動している住民たちと語り合い、そのむすび目となる『としょかん』を刊行してきました。くじけそうになる多くの住民をばげま活動をして、優れた図書館の生みの親となりました。
 菅原さんをしのび、あわせて、菅原さんが最期まで憂慮されていた、日本の図書館の現状、そこから抜け出して自分たちのための図書館として再生させる道筋をみんなで考え、語り合うひろばとして集いをもつことにしました。お出かけください、語り合いましょう。

2012年1月23日、東京はアルカディア市ヶ谷(私学会館)を会場にして、菅原峻さんをしのぶ会が催されました。北海道や東北、大阪、山口から、図書館人、研究者、市民の会、施設づくり等、同時代に図書館を生きてご縁を育んだ100人近い方達が参集しました。としょかんを昨日から明日へ、菅原さんから受け取ったバトンをどうつないでゆくか、想い確かめました。



(撮影: 漆原 宏)

今日を 明日へ

「としょかん村」は、2009年4月から2012年春の10号まで、村長の菅原峻を中心に10人の同人により、季刊で刊行となりました。いろいろな形で共に歩いてくださった読者友人の方々に、としょかん村同人一同感謝のごあいさつを申しあげます。

さて、先頭に立って私達同人を叱咤激励した村長の菅原峻が、天上の図書館視察旅行でしょうか、2011年6月24日 突然思いついたように村を出て旅に出かけました。置き手紙の『図書館の明日をひらく』（晶文社刊）には、なぜ＜図書館をはじめの＞なのか、図書館を一生の友だちに、北欧の図書館に学ぶこと、＜ライブラリーシステム＞を考える、図書館（建築）を図書館としてつくる、なぜ＜市民の図書館＞なのか、など6つの

大きな謎の宝を探しつづけよと書いてあります。そこで私たち同人は、新村長選挙は横に置いて、それぞれの畑で同人・友人と連帯して、自身の言葉を鋳に、謎の宝を探しつづけることになりました。あたらしい連帯のかたちもこころみるべく同人誌「としょかん村」終刊10号の出版をここに協働しています。10号では、同人衆の原稿に加えて、旅立ちの前に村長が依頼をしていた「村の友人」の寄稿や各地友人達の送別会の記が、村長の空席を埋めています。「としょかん村」が書き手と読み手が出会い交流する「ひろば」であることは、菅原村長が図書館に求めて夢みた7つめの謎の宝であることは皆の知るところです。明日への架け橋の「図書館」です。ひとまずの終刊にあたり、これまでの「としょかん村」へのご友情に 村同人一同感謝申し上げます。

わたしたちの同人誌「としょかん村」は、菅原峻村長言うところの「読んで欲しい人」、つまり、「共にとしょかんを学びつづける友人たち」に 感謝とともに届けられました。

石山 洋／棚橋満雄／平形ひろみ／佐藤晃二／三上強二／川端英子／小原一明／片野裕嗣
大澤正雄／今泉節子／岩城信吉／吉川克彦／野澤新治／樋山ミチ子／山川 精／佐賀絹江
遠藤文子／丹羽秀人／小野寺信子／清野良憲／大島教子／下村憲一／煙山康子／大阪克彦
久須美英雄／佐々木幸枝／服部和子／小笠原 淳／石原 誠／石沢 俊／佐久間美紀子
土肥寿郎／大沼芳徳／石井一弘／石沢文規／石沢睦美／斉藤浩二／田中文雄／山本宣親
合田美津子／近藤周子／阿曾千代子／力丸世一／赤尾幸子／増山正子／猪名川町立図書館
鈴木史穂／大塚久美子／中山康子／芦野 弘／西岡三千代／フックス真理子／勿滝清春
大野多恵子／田戸義彦／山本優雄／島雄康一郎／藤原孝一／西川馨／増田浩次／渡部幹雄
古瀬義孝／田野正人／遠藤聡太郎／山口博行／安斎久司／早川光彦／明定義人／福山和子
筒井惇美／隈美智子／石倉雅子／山口祥子／岩出景子／近藤幸子／岡本金子／武田瑠美
土屋佳英子／田中加津代／石橋進一／小川悦子／成松一郎／芦原厚子／豊能町立図書館
岡田進・美知子／河地良一／小寺卓矢／宮川綾子／大西秀人／平野美和子／中谷美千代
久保朋子／吉野昌子／佐久嶋靖子／川野留理子／黒野眞明／深水 薫／富 博／柳瀬信介
久竈八重子／坪野 忠／橋本 忠／篠原順一／神原和子／松原展与／秦 直子／簗田明子
斎藤由佳里／中古賀葉子／中村勝美／津田ミナ子／唐井永津子／鈴木由美子／野本道子
鈴木陽子／司城 修／新田琴子／小川 徹／辻 和子／中野正義／渡辺順子／小澤嘉謹
嵩原安一／山本安彦／松原伸直／渡辺 進／菅原 勲／江山規子／津田恵子／参納哲郎
伊藤幸枝／森 幹雄／柴田幸子／藤村 聡／敷田千枝子／朝倉雅彦／森岡こう／菊地昌子
山田浩幸／田沢恭二／大島幹子／酒井 信／植田喜久次／尾山純一／片山睦美／栗山規子
梅田順子／中村佐市／犬塚まゆみ／相良 裕／中野 亘／前田 賤／塩田敏夫／虫賀宗博
柳田邦男／岡崎美也子／谷村和子／西田博志／田口美春／押樋良樹／吉岡雅子／金子一郎
山田登美子／石垣貞子／阿部明美／前山ノブ／佐々木弘／丸地真人／青木和子／馬場俊明
南田詩郎／原田洋子／長澤正樹／漆原 宏／中津川年江／天谷真彰／加藤靖子／大川純彦
畠山 豪／星川迪子／後藤 暢／西河内靖泰／秋本美津／梶原和光／最首洋子／菅原昌代
国立国会図書館収書部／日本図書館協会資料室／埼玉大学共生社会教育研究センター
筑波大学図書館情報学図書館／大阪国際児童文学館
(敬称略順不同)

としょかん村同人 菅原 峻 / 荒木英夫 / 石沢 修 / 草谷桂子 / 小松晴子
(企画編集：と村同人 協働) 才津原哲弘 / 寺田芳朗 / 福山恭子 / 堀江三千代 / 山崎周作
協力：小林春奈+中野寛之

としょかん村 第10号／2012年2月1日発行（季刊）／表紙 題字・最首翠風 挿絵・金子一郎
／頒価0円／10号発行所 〒231-0023 横浜市中区山下町193 寺田大塚小林計画同人 方